

---

2001 年度

フルブライト・メモリアル基金(F.M.F.)による  
マスター・ティーチャー・プログラム派遣団  
報 告 書

---



( 2001/3/16 ~ 4/1 )

広島市立 美鈴が丘高等学校  
Hiroshima Municipal  
Misuzu-ga-oka High School

都 甲 誠 嗣

Teacher

TOKO Seiji

平 岡 幸 樹

Tech. Coordinator

HIRAOKA Koki

廣 田 独 志

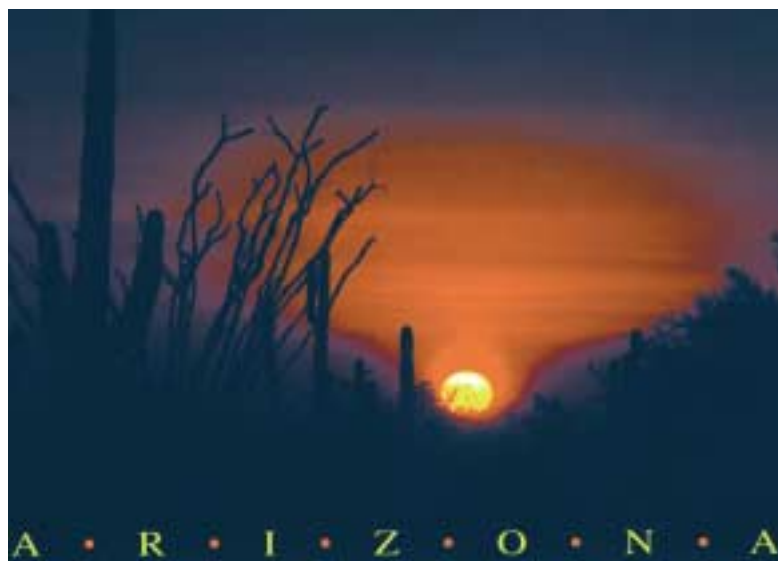
Administrator

HIROTA Hitoshi

---

# CONTENTS

1. はじめに .....	1
2. M.T.P.2001派遣団員名簿 .....	1
3. 研修・視察日程 .....	2
4. 集合・オリエンテーション .....	5
5. ワシントンD.C.活動報告 .....	8
6. パートナー校との連携 .....	29
7. 帰国および研修報告会 .....	41
8. おわりに（あとがき） .....	43



アリゾナの夕景

## 1. はじめに

この度、我々3名（平岡、都甲、廣田）の者が2001年度フルブライト・メモリアル基金によるマスター・ティーチャー・プログラム派遣団として、ワシントンD.C.およびアリゾナ州に派遣されました。

これはアメリカ合衆国の現地視察や教育行政関係者との懇談・学校訪問・教職員との意見交換を通して、国際視野を広め、国際理解・世界平和への認識を一層深め、併せて日本とアメリカ合衆国との親善と友好を図ることを目的としたものです。

この趣旨にそって、我々はアメリカ合衆国の関係者の方々と親善と友好を深めながら、二週間、精一杯の研修を行ってきました。以下、その詳細についてご報告します。



タラビ・ホテルにて 左から廣田、都甲先生、平岡先生



成田へ向かう東京駅のプラットフォームにて  
左 廣田、 右 都甲先生

## 2. 2001年マスター・ティーチャー・プログラム派遣団員名簿

都 甲 誠 嗣	男性	42歳	Teacher
現 住 所 電話番号	広島市 東区山根町28-22-601 (〒732-0048) (082) 264-3781		
勤 務 先	広島市立 美鈴が丘高等学校		
住 所 電話番号 FAX番号	広島市佐伯区美鈴が丘緑二丁目13-1 (〒731-5113) (082) 927-2249 (082) 927-5530		
平 岡 幸 樹	男性	39歳	Tech. Coordinator
現 住 所 電話番号	広島市佐伯区美鈴が丘東二丁目5-9 (〒731-5111) (082) 927-0796		
廣 田 独 志	男性	50歳	Administrator
現 住 所 電話番号	呉市海岸一丁目5-12 (〒737-0823) (0823) 24-7760		

## 3. 研修・視察日程

月・日	日 程	時 刻	交通機関	用 務 など	宿泊地
3月16日 (金)	広島駅発 上野発 成田空港着	09:25 18:30 19:30	ひかり130号	集合場所である千葉県のリーガロイヤルホテル成田へ	成田泊 リーガロイヤルホテル成田 (0476)33-0700
3月17日 (土)	成田空港発 シカゴ発 ワシントン着	14:55 13:14 16:09	UA 884 UA 366	午前中 会議室で注意事項、グループ確認 出国手続後空路シカゴへ 入国手続後、ホテルへ	ワシントンD.C.泊 ウインダム・シテイ・セ ンターホテル (202)7750800
3月18日 (日)	ワシントンD.C.	10:00 16:00	貸し切りバス	ワシントンD.C.市内視察	ワシントンD.C.泊 ウインダム・シテイ・セ ンターホテル (202)7750800
3月19日 (月)	ワシントンD.C.	09:00  12:20	JICC  貸し切りバス	午前中 グループ・セッション(共同研 究およびMTPへの抱負発表) 午後 学校訪問(教員らと懇親会)	ワシントンD.C.泊 ウインダム・シテイ・セ ンターホテル (202)7750800
3月20日 (火)	ワシントンD.C.		貸し切りバス	午前・午後ともにグループ・セッション 学校訪問(教員らと懇親会)	ワシントンD.C.泊 ウインダム・シテイ・セ ンターホテル (202)7750800
3月21日 (水)	ワシントンD.C.	09:00 13:00	JICC	学校訪問報告会 テクノロジー・トレーニング	ワシントンD.C.泊 ウインダム・シテイ・セ ンターホテル (202)7750800
3月22日 (木)	ワシントンD.C.	08:00 18:00	地下鉄・徒歩 貸し切りバス	国連教育審問 レセプション(日本大使館)パートナーと行動	ワシントンD.C.泊 ウインダム・シテイ・セ ンターホテル (202)7750800
3月23日 (金)	ワシントンD.C.	09:00	JICC  地下鉄	午前中 日米合同オリエンテーション アメリカ側のパートナー(マヤ高 校長)と行動 午後 ワシントンD.C.視察	ワシントンD.C.泊 ウインダム・シテイ・セ ンターホテル (202)7750800
3月24日 (土)	ワシントンD.C.	10:00 16:00	地下鉄 タクシー	パートナーと活動 パートナー校プログラム	ワシントンD.C.泊 ウインダム・シテイ・セ ンターホテル (202)7750800

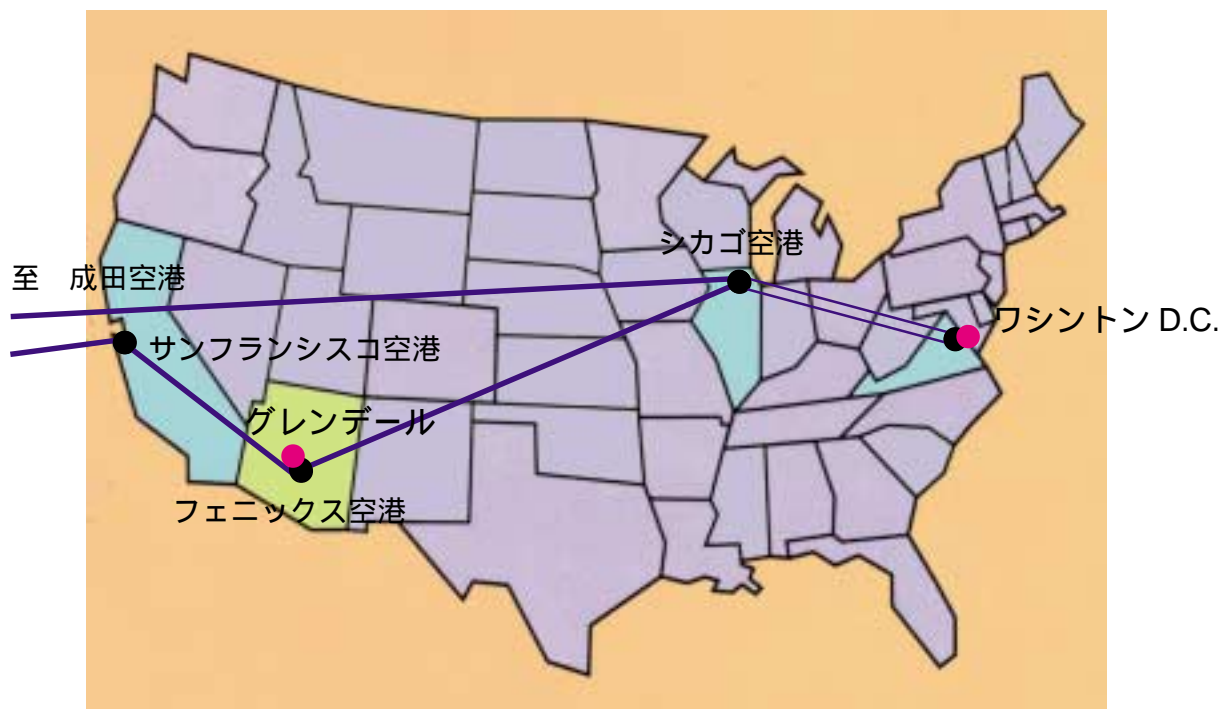
宿 泊 施 設		
千葉県成田市	リーガロイヤルホテル成田	TEL (0476)33-1121 FAX (0476)33-0700
	千葉県成田市小菅456	
ワシントンD.C.	WYNDHAM CITY CENTER	TEL (202)775-0800 FAX (202)331-9491
	1143 New Hampshire Ave. NW, Washington D.C. 20037	

月・日	日 程	時 刻	交通機関	用 務 など	宿泊地
3月25日 (日)	ワシントンD.C. アリゾナ州	10 : 00	UA609 UA1569	チェックアウト パートナー校へ	アリゾナ州泊 イン・タラビ (602)896-8900
3月26日 (月)	アリゾナ州	08 : 00 18 : 00	自家用車 ホテル内	パートナー校・マヤ高校へ レセプション (マヤ高校・レオナグループ)	アリゾナ州泊 イン・タラビ (602)896-8900
3月27日 (火)	アリゾナ州	08 : 00 13 : 00	自家用車	午前中 マヤ高校授業参観およびコンピュータールーム見学 午後 グレンデール市内視察	アリゾナ州泊 イン・タラビ (602)896-8900
3月28日 (水)	アリゾナ州	09 : 00 13 : 00	自家用車	グレンデール市内視察 (警察署見学など) 午後 フェニックス市内アメリカン・ネイティブ博物館およびローハイド訪問	アリゾナ州泊 イン・タラビ (602)896-8900
3月29日 (木)	アリゾナ州	05:00	自家用車	ウォルナット・キャニオン グランド・キャニオン オーク・クリーク・キャニオン視察	アリゾナ州泊 イン・タラビ (602)896-8900
3月30日 (金)	アリゾナ州 サンフランシスコ	08 : 15 13 : 00	UA2359 UA 837	フェニックス発 サンフランシスコ発	アリゾナ州 機中泊
3月31日 (土)	成田空港着 東京・品川 (高輪)	16 : 55 18 : 00	UA 837 JR成田線	帰 国 ホテル着	ホテル・パシフィック泊 (03) 3445-6711
4月 1日 (日)	東 京	08 : 00 11 : 30		研修報告会	
4月 2日 (月)	東京発 広島着	12 : 00 18 : 00	JR新幹線	帰 広	

宿 泊 施 設		
Glendale Arizona	Inn at Talavi	TEL (602)896-8900 FAX (602)896-8991
	5511 West Bell Road Glendale ARIZONA	
東京都港区	ホテルパシフィック東京	TEL (03)3445-6711 FAX (03)3445-5733
	東京都港区高輪三丁目13 - 3	



## 飛行機便と訪問した州および街



月日・曜日	機体番号	出発地	目的地
3月17日(土)	UA884	成 田	シカゴ
	UA366	シカゴ	ワシントンD.C.
3月25日(日)	US609	ワシントンD.C.	シカゴ
	UA1569	シカゴ	フェニックス
3月30日(金) 3月31日(土)	UA2359	フェニックス	サンフランシスコ
	UA837	サンフランシスコ	成 田



飛行機チケットの切れ端

左から成田～シカゴ、シカゴ～ワシントン、ワシントン～シカゴ、  
シカゴ～フェニックス

## 4. 東京集合および出発前オリエンテーション 3/16・/17

3月16日(金) 宿泊地: 成田空港・リーガロイヤルホテル・成田

9:00 広島駅集合、広島発

14:15 東京着

19:30 ホテル着

東京では、アメリカへ行ってからすぐに必要になる物品(電池やビデオカセットなど)を購入するために秋葉原へ行く。その後、JRで成田空港第2ターミナルへ向かい、シャトルバスでリーガロイヤルホテルへ20:00前に到着する。すぐに、1階のロビーで手続きを済ませ、各自の部屋に入る。ホテル内で夕食を摂った後、最上階の喫茶室で明日からの打ち合わせを1時間半ばかり行う。

3月17日(土) 午前中 出発前研修(リーガロイヤルホテル・成田)  
午後 出国(シカゴ経由ワシントンD.C.)

6:00 起床

7:15 三人(都甲、平岡)で1階のラウンジにて朝食を摂った後、宅急便で不要な書類や物品を田舎に送り返す。

8:10 チェックアウトして、このホテル内の2階にある会議室でアメリカでの注意事項や各チームの紹介およびグループ行動での事前打ち合わせや今回のテーマに対する各自の意見などを述べる。今年度は「土壌 -soil-」である。各チームともこういった研究に慣れているらしく、多種多様な意見や質問が出て感心させられた。ちなみに、わたしはレッドの2班である。

13:30 大型荷物を預け、諸注意とともに航空チケットを受け取る。その際、ワシントンD.C.以後および帰りのチケットを請求する紙も渡される。



リーガロイヤル・成田 昼食後 左 都甲先生、右 廣田

成田空港・出発前  
左 都甲先生、右 廣田



15:30 搭乗手続き後に、成田を離陸する。(UA884 成田空港 シカゴ空港)

雪景色のシカゴ

シカゴで荷物をワシントン行きの飛行機に移すために、別なカウンターまで運ぶ。その後、出発ターミナルを国内線にすべく移動。シカゴは雪景色であった。これは近年にはないとのこと。

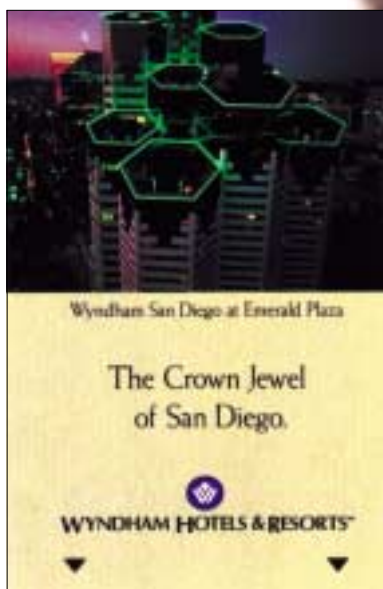


ことわりがない限り、ここから現地時間(ワシントンD.C.の時間)

2:00(日本時間) UA366 の中では疲れきって寝てしまっていた。(隣の人と話す元気もなかった。)(UA366 シカゴ空港 ワシントンD.C.)

16:00頃 ヴァージニア州の空港から東の方向にあるワシントンD.C.までバスで移動する。  
宿舎はホワイトハウスとジョージタウンの中間にあるウィンダムホテルである。

ワシントンD.C.の宿泊所であるウインダム・シティ・センターホテル前の夜景



ウインダム・シティ・センターホテルのカードキー

19:30 3人で近くにある「ブラッキーズ」というステーキ屋へ行く。一人70ドルも払った。食いしん坊の広田も量の多さにげんなり。時差ぼけなのか、帰宅後すぐに就寝。(4:00には起床)



## \* ワシントン 1 日目の感想

ウィンダムホテルで驚かされたことは、各室にコンピューター用の電話回線端末が引いてあることである。すなわち、それだけパソコンというメディアがアメリカでは普及しているということになる。フルブライトの今回の MTP 研修の前後から E-mail と internet には必要性を感じていたが、気持ちを一層強くした。

過去にインターネットを立ち上げてもらって触れてみた経験はあるが、そのときはそれほど感銘を受けなかった。それよりも、外に開かれている自分のコンピューターを想像すると、あまりに無防備でウイルスなどに簡単に感染してしまう危険を抱いた。すなわち、コンピューター環境が良いならば、それを維持するべきだと考えてきた。それ故、便利だと言われても、頑なに拒んできた。ただ、アメリカ出発の一週間前くらいから E-mail の便利さに「目から鱗」状態であった。さらに、ホームページにも関心を抱くようになった。こういったことに気づく機会を与えていただいたフルブライトの研修に大いに感謝の念を送りたい。



(表)

(裏)

ホテル内にあったネット用の電話接続のための案内 使用料 10 ドル

ステーキ屋でのこと。地の利がよく分からないので、ホテル到着前にバスの中で紹介してもらった「ブラッキーズ」というステーキ屋へ3人で行くことにした。まず驚いたのはその量である。わたしも日本では大食漢と言われてきたが、アメリカでは並の範疇だなと感じた。まず注文したときに「オンス」という量の単位が全く分からずに少し不安になった。それでもわたしの方はヒレ肉のミニッツステーキだからケガがなかった。しかし、愛すべき都甲先生は同じ値段でも普通のステーキを頼んだため、ひどい目にあった。大きな皿からはみ出した・より大きいステーキが来てしまった。「わたしでも無理だな」と思う大きさであり厚さであった。さらに火に油をそそいだのが、副食にアスパラガスとキノコを頼んだことである。それもアスパラガスを two と言っていた。値段を見て、いくら何でも1本で10ドルということは考えられないと伝えた。案の定、深皿に山盛りのアスパラガスが2皿来てしまった。キノコも小さなしいたけのようなものが、深皿に山盛りであった。皆、顔を見合わせてげんなり、同時に苦笑がもれた。

さて、「アメリカ人は肥満している人は管理職につけない」などと聞いていたが、これは彼らがあまりに肥満しているための警告なのかと理解した。本当に身体の大きな人が多かった。30 過ぎの人でお腹が大きく出ていない人を見つけるのがむずかしかった。また、お尻などは男女ともわたしの2・3倍の大きさであった。エコノミークラスのシートに座れるのかなと危ぶんだ場合も多々あった。

(文責： 廣田)

## 5. ワシントン D.C. での研修および教育視察 3/18 ~ /24

(1) 3月18日(日) ワシントン D.C. 視察

宿泊地: ワシントン D.C.・ウイングダム シティ センターホテル

7:30 肌寒い快晴の街中を3人で朝食を摂る店を捜す。マクドナルドへ行って軽く食べた後、セント・グレゴリーホテルの2階の喫茶室でも食事を摂る。

10:00 観光バスで、ホワイトハウス、マイルの基準点、ワシントン記念碑、ジェファソン記念堂、リンカーン記念堂を訪問する。

アムトラック(鉄道)のロイヤル駅の地下にある食堂街で昼食を摂る。インド料理を食べたが、味はもうひとつだった。



左 ロイヤル駅地下のフード・コート  
左 都甲先生、右 廣田



上 アムトラック・ロイヤル駅  
左 都甲先生、右 平岡先生

次に議事堂、スミソニアン博物館(歴史博物館、自然史博物館)を見学(17:30)帰りは美鈴が丘チーム3人で地下鉄に乗ってホテルに帰着する。



ワシントン D.C.  
地下鉄路線図

下 地下鉄のキップ(表・裏)





上 議事堂前の池にて  
遠く記念塔、さらに向こうにリンカーン・メモリアル  
真ん中で手を広げているのが都甲先生  
手前でカメラをかまえているのが平岡先生



右 リンカーン・メモリアルにて  
左から 都甲先生、平岡先生、廣田

## \* ワシントン 2 日目の感想

尊敬するトーマス・ジェファソン・メモリアルを訪問した。7 代のジャクソン大統領とともに偉大な人物として世界史で学んでいたの、こんな記念堂ができていたとは知らなかった。(リンカーン・メモリアルは有名だが.....) モニュメントも池も美しく、さらに日本から贈られた桜の木が周りを覆っている風景に感動した。(表紙の写真を参照)

昼休みにアムトラックのロイヤル駅に行った。しかし、日本や欧州のように、鉄道は発達しなかったようだ。国土が広すぎて、飛行機でないと合理的でないようだ。その点少し寂しい気がする。

今日はトピックがある。後で分かることだが、朝セント・グレゴリーホテルへ言ったときに 200 ドル入りの免許証入れを落としてしまった。観光バスに乗るときに気づき、暗い気持ちになった。お金は絶対に出てはこない夕食にホテル傍の中華レストランへ行った。その後、「コーヒーを飲(平岡、都甲両先生)をセント・グレゴリーホテル 100% あきらめていたのいカウンターにいる人にきには何も答えてくれないウェイトレスがわたしに来てくれた。「アンつい、口に出てしまっアメリカが好きになってし

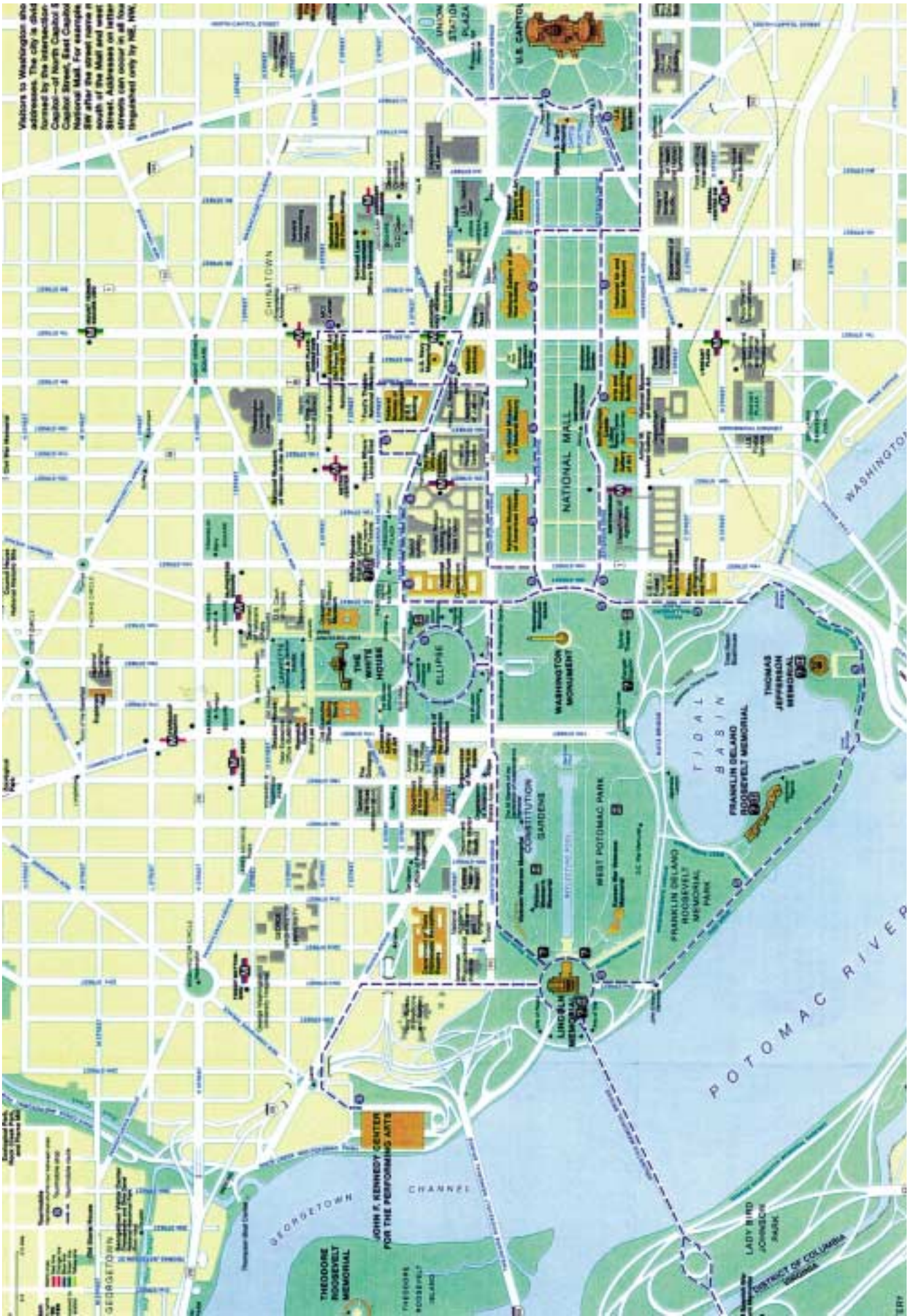


失ったと思った 200 ドル入りの黒の免許証入れ

この事件はすぐに平岡氏と都甲氏によって美鈴が丘高校に E-mail され、学校の皆が知ることになった。昨日のステーキハウスの写真とともに、ネットで送られ事務室に飾られていたとのこと。

(文責： 廣田)







## WASHINGTON D.C.



上 議事堂の夕景

左 ホワイトハウス

## ワシントン D.C. 視察



上 リンカーン・メモリアル側から議事堂を望む



上 リンカーン・メモリアル

右 ホワイトハウス側からトーマス・ジェファソン・メモリアルを望む  
遠くに見えるのはポトマック川





(2) 3月19日(月) 午前中 JICCでグループ・セッション  
午後 各グループに分かれて学校訪問  
宿泊地: ワシントンD.C.・ウイングダム シティ センターホテル

\* JICC: 日本文化情報センター (Japan Information and Cultural Center)

7:30 三人(都甲、平岡)でいつものセント・グレゴリーホテルの喫茶室で朝食を摂る。

9:00 JICCでグループ・セッションを行う。各学校の研究計画とMTPへの抱負などを管理担当のものが代表として述べる。(その際、各チームの写真も撮影する。)我が校としては主に水生動物を研究対象にしたいことと、アリゾナの現地の環境を見ないとテーマを決定しにくいと伝える。また、校長から姉妹校の提携の密命も受けていることを報告した。



左 都甲先生、右 廣田

11:30 今回の参加者全員がウイングダム・シティ・センターホテルの地下で一緒に昼食を摂る。

昼過ぎから各グループに分かれて学校訪問をする。

赤グループ(廣田) : ベンジャミン・ベネッカー・アカデミック高校

(Benjamin Banneker Academic High School)

青グループ(平岡先生): リチャード・モンゴメリー高校(Richard Montgomery High School)

黄グループ(都甲先生): モンゴメリー・ブレアー高校(Montgomery Blair High School)

#### (1) 赤グループ・廣田 ベンジャミン・ベネッカー・アカデミック高校

12:30 ホテルから20分ほどバスで走った地域に高校はあった。場所的にはあまり治安の良くない場所のように思えた。バスが到着したのは狭い路地であり、どこかの学校の体育館の裏と思われる場所が正門であった。中へ入ると、金属探知器のゲートを通った。生徒の武器携帯のことは聞いていたが、本物を見せられるとアメリカの教育はここまで来たかと感じた。日本の我が校のように地域に開かれている学校というよりも、その地域から隔離している学校という印象が強かった。

タッカー校長の説明によると、学習面・進路面に力を入れているようであった。ちょうどわたしの高校時代の受験戦争時代の息吹を感じた。特に力を入れているのは、国際バカロレア試験の認定校になるべく最後の評価の年なので頑張りたいと伝えていた。(3年間の実績がいろいろいいらしい。)とにかく、子供の優秀さと先生方の教育熱心なことを強調されていた。

日本の教育はこれとは対極に位置し、生徒の個性を重視し、ゆとりある教育へと向かい、今もそれを教育の理想としている。しかし、日本はわたしの高校時代(現在のアメリカの教育)の教育に変わろうとしている。アメリカも現在の日本の教育を理想とするのだろうか。いまの若者たちの無知で無目的で快楽的なものばかり追求している姿をいろいろな場面で見せられると、昔を回顧するわけではないが、真面目で規律ある高校生が懐かしく思えてならない。教育というのは、その両極(知識を大切にする教育と個性を伸ばす教育)を行ったり来たりするものなのかも知れない。

学校施設は古いものばかりだったが、清潔感を感じさせた。我々を案内してくれた生徒たちも優秀な生徒らしく優等生とか奨学生とかに選ばれ、掲示板に名が貼られていた。また、黒人が多いように思えた。さらに、廊下に本を投げ出していたり、ロッカーがダイヤル錠になっていたことに少々驚かされた。



左 我々のチームを案内してくれた女子生徒(彼女は掲示板の左に「優秀者で奨学生として選ばれた」と記されている)



ダイヤル錠付きのロッカー



高校の玄関前      ベンジャミン高校の先生方と視察に参加された先生方

要は学校という器が良くても何にもならない。すなわち、その中にいる生徒の質で良くも悪くもなるのだということを実感した。

16:00 まで、この学校の先生たちとの茶話会形式の教育の違いを述べあったりして過ごした。

16:30 にはホテルに帰った。

18:30 明日の朝の出発(6:00 出発)が早いので、近くのガソリンスタンドで簡単な食べものを買って、近くの喫茶室で軽く食事をして、各部屋に帰る。  
(文責: 廣田)

## (2) 青グループ・平岡先生      リチャード・モンゴメリー高校 (MD)

伝統ある総合高校で、生徒数は 1668 名。軍に入隊するコースや職業訓練コースなど様々なコースがあり、コンピューターや水道管の工事、写真の現像など様々な学習に取り組むことができる。また、国際バカロレアとよばれる優秀なクラスがあり、そこでは大学 1 年生の単位がとれる。

クラブ活動にも非常に力を入れており、休日にはクラブの遠征などで 4 台あるスクールバスはいつも出払っているそうだ。

この高校には英語を母国語にしない生徒が 60 カ国 120 名いて、英語能力を 5 段階に分けて英語(国語)の授業を行っている。それらの生徒は 1 日 3 時間英語の授業を受け、残りの 3 時間は普通の授業を受ける。

授業で教科書はほとんど使っていない。アメリカでは教科書は参考書としての扱いだそうだ。アメリカではカリキュラムや教科書など教育に関することは連邦政府が決めるのではなく、行政の一番低いレベルの郡で決めるそうである。教科書は郡が選んだものの中から教師が選んで授業をする。

カウンセラーは 6 名いて、主な仕事は大学進学準備のための手助けだそうだ。また、成績不振の生徒の原因究明をして、本人や教師、保護者にアドバイスをすることもある。ちなみに不登校の生徒はあまりいないそうである。アメリカでは 1940 年代からカウンセラーを学校に配置をはじめたそうだ。



歴史の授業: 調べたことを劇にして発表しています

コンピューターの実習風景



図書室はメディアセンターと呼ばれており、コンピューターが設置してある。この学校ではインターネットを十分に活用しており、各先生のウェブページを見たらその日の宿題のヒントなどが載っていたりする。コンピューターは基本的には自由に使えるが、不正な使用については厳しく対処している。

生徒はみんな生き生きしており、授業中に寝たり私語をしたりするような生徒はいなかった。

(文責: 平岡先生)

## (3) 黄グループ・都甲先生 モンゴメリー・ブレアー高校 (MD)

## 12:15 黄色グループホテル出発

学校到着まで通訳のマックウィーンさんから町の風景や歴史についていろいろ話を伺う。落ちついた雰囲気郊外の住宅地といった感じの町並みを抜けて 13:00 学校着。校長先生より学校概要説明の予定であったが、学校の方の都合で、急遽予定変更となる。案内をしていただいたのは過去に MTP に参加した経験を持つピーター・カール先生で、若くて意欲的な方でした。

生徒数が最大の 3000 人の巨大な学校で、さまざまな人種・宗教・社会階層の生徒達に通っている。この学校ではマグネットプログラムによって学区外からも中学から試験を受けて科学に興味・関心のある生徒を集めている。

この学校の特徴として ID バッチ利用があげられる。それぞれの生徒は首から ID カードを下げており、そのカードは生徒の身分証明・本の貸し出しの際に使われるだけでなく、校内においてクレジットカードとして利用できる。図書室は大変充実しており、本日は近日行われる予定のアートショウの準備を生徒が熱心に行っていた。いずれの作品も心なしか色彩が鮮やかで、カラフルなように感じた。

ランチルームは一度に 750 名収容可能で、大変巨大な施設である。10:45 から 12:30 の間生徒達は交代しながら昼食をとる。

巨大な学校であるため 5 人の副学長が配置されている。今、校内の最大の問題はベンディングマシーンを巡っての論議だそうで、いづこも同じといったところ。

カウンセラーは 9 人おり、進学のことやコースのことなどいろいろな相談活動を行っているとのこと。それにしても 9 人とは驚きである。

13:30 から私たちは 3 人のグループにわかれ生徒にエスコートしてもらい授業を参観する。授業は 1 コマを 90 分単位で行い、日本とは大きく違う。理科の立場で言うと、うらやましい限りである。最初に化学の実験を参観。ちょうど実験中でそれぞれの生徒はゴーグルをつけている。メスシリンダーには転倒防止の配慮がなされており安全面での配慮が行き届いているのに感心する。2 人 1 組で各グループとも同一の実験を行っている。どの生徒も熱心に取り組んでおり、確認をしたり話し合ったりとコミュニケーションを盛んにとっているのが印象的である。



化学実験風景 皆、熱心に取り組んでいました

続いて生物の実験授業の参観。ここでは、ほおの粘膜の観察スケッチ及びレポート作成を行っていた。それぞれのグループの進度に応じて実験やレポートづくりを行っている。とかく我々は一斉に実験、同一歩調で授業を組み立てることが多い中、比較的のんびり進行しているように感じた。しかしそれぞれの生徒、グループに応じたペースで生徒が自分たちで、ことを成しているという点は参考にしたい。次にカメラ作成の授業。3 人 1 組のグループで簡単なカメラを作成している。そのほかインターネットの授業、コンピュータの授業を参観したが、いずれも生徒の活動をしっかり、ゆったりと取り入れている点が日本と大きく異なるように思えた。その中でそれぞれの生徒が主体的に動いているのが印象的であった。



14：30 から休憩をはさんで 14：45 からこの学校の先生との懇談会。  
はじめにマグネットプログラムについて説明を受けた。

### マグネットプログラムについて

マグネットの生徒 400 人、先生 20 人。

以前は学力、人種いろいろな面で均等にバランスを重視した教育政策が行われていたが、このプログラムを導入することにより、幅広く優秀な生徒を集めることができ、設備の充実がはかれる。そしてレギュラーの生徒もその設備を使用することができる。マグネットの生徒の真剣さが学校全体の雰囲気になで広がることが期待できる。学校の知名度が上がる。などのメリットもある。

一方で課題もある。

学校の中に 2 つの学校がある感じ、一般の生徒に広がりにくい。

ほかの学校には芸術、コミュニケーションなどマグネットプログラムもある。

マグネットプログラム賛成、反対の両論がある。



校舎内のメインストリート 「さすが、大規模校！」

### 生徒の活動について

校内の廊下の名前を生徒が付けており、親しみやすい学校づくり、雰囲気を作っている。

### インターネットの利用について

校内ネット「ベン」の有効性

宿題や連絡プリント等それぞれの家庭で観ることができる。親との連絡等も e-mail で行い、将来はテストもウェブで行う予定とのこと。

60%の家庭はインターネット可能、40%が持っておらず、とにかく連絡を取りたいケースが発生するのは 40%の家庭の方が多い。

以上、日本ではあまり見られない巨大な学校を見学することができた。どうやらアメリカの高校では日本のように H R 担任というものはなく、教科の担任がそれぞれの生徒にしっかり関わり、チームを組んでいる。チームで複数の生徒を受け持ち、対応していく。日本とアメリカの大きな違いである。本日訪問した学校においても、日本と同様な問題、課題を抱えているらしく、なんだか妙な連帯感を感じた。

(文責： 都甲先生)

## (3) 3月20日(火) 午前・午後ともに学校訪問(各グループ2校訪問)

宿泊地: ワシントンD.C.・ウイングダム シティ センターホテル

- 赤グループ(廣田) : メアステラー中学校 (Marsteller Middle School)  
ベネット小学校 (Bennett Elementary School)
- 青グループ(平岡先生): ゴーシェン小学校 (Goshen Elementary School)  
フォーリスト・オーク中学校 (Forest Oak Middle School)
- 黄グループ(都甲先生): パーク小学校 (Park Elementary School)  
ブルックリン・パーク中学校 (Brooklyn Park Middle School)

- (1) 赤グループ・廣田 午前中 メアステラー中学校  
午後 ベネット小学校

## メアステラー中学校

## 実験風景(電気分解)

まず、校長の挨拶の後、用意された軽食を摂る。中学2年の生徒の案内で11:00頃まで各教室を見てまわる。最初に案内されたのが食堂で、そこに2組の生徒を入れ、二人の先生が数学を指導されていたのには驚いた。(数学の先生が休まれているので、専門の先生と補助の先生との合同授業とのことであった。)平屋建てで、体育館の授業などは中から鍵をかけるので生徒も大変らしい。訪問された先生の一人が誤って閉め出されたとのこと。やはりこの学校も授業中になるとスクールポリスが玄関口などに位置し、授業のない先生方も各廊下などにたむろしておられた。



この学校は特に理数系に力を入れているとのことであった。理科学研究のプレゼンテーションを見せてもらった。このときに使われているダンボールの用紙に興味をもった。(市販のものらしい。)

ただ残念なことに、この学校の敷地は隣の教会に売却されて、来年度からは生徒は別々な学校に分散されるらしい。日本では少し考えられないような話ではある。この間、次の訪問する小学校の保護者(日本人)の一人が通訳の一人として参加された。この学校での最後の挨拶を代表として行ったが、時間が押し迫ったことにせかされて、思うように全てを言えなかった。(残念だった。)ただ、ここでの言葉をアリゾナのグレンデール市に行ったときに、報道機関の人に尋ねられたときの答えに使った。

## ベネット小学校

## ベネット小学校の玄関前



到着後、校長先生がすぐに挨拶をされた。この学校でも玄関に日本語で歓迎の言葉が書かれていた。その後、用意されたスナックを食べた後、早速に授業参観である。この近辺の数校の小学校からIQの高い子供たちを20人くらい集めて、水曜日だけ合同授業をする。SIGNET (Schools involved in Gifted Needs Today)と呼んでいた。遊びも高度であり、国語の遊びで親戚関係を表したカードがあり、そのカードにはその人の簡単な略歴が書いてある。これを文章を理解しながら関係を考えていくわけである。わたしも挑戦してみたが、混乱してしまった。(英語は分かるが、基準になるカードを見つけなくてはなかなか読みとりにくいように作られていた。すなわち、論理的な思考ができていないと、解釈ができないカードである。その他、ロゴの積み木や知能教育に役立つものがふんだんにおいてあった。(通訳として参加された日本人の女性(この学校に子供を通



わせている)は、こんな制度があるとは知らなかったと言っていた。)

その後、優等生クラスの生徒たちと食堂で一緒に給食を食べることになった。一般の生徒はちょうど食事が終わりがけたところで、「こんにちわ」という大合唱で迎えてくれた。それが食堂内に反響して大変な騒音だった。その間、優等生クラスはすました態度で静かに食事をしていた。しかし、一般生徒がいなくなるや、小学生本来の姿に戻り、騒ぎ始めた。やはり、一般性とのいる前では、自分たちは違うというポーズがあるらしい。



SIGNET の子供たち

カードゲームの風景



食堂風景

その後、一般クラスの授業などを見たり、学校内のいろいろな施設を見てまわった。ここも外部の進入には厳しく反応しており、外に一端出たら自動的に鍵がかかる仕組みになっていた。

15:30 ~ 16:00 は、生徒たちの下校風景を皆で参観した。玄関の外に視察組の先生方が皆並んで、スクールバスや迎えに来た車を見送った。このときも「こんにちわ」の大合唱だった。どの先生方も教師の顔になっており、笑顔で一人ひとりに声をかけておられた。

16:00 から我々とこの学校の先生方との質疑応答などが行われたが、この学校に馴染んだ我々は積極的に質問をし始めた。この学校の先生方も下校時の我々の姿を見られて、国は違えど同じ教育者だと理解してくれたらしく、友好かつ活発に討論しあって有意義な交歓会になり、この場を去りがたかった。主に、「子供のしつけがよくできているが、どのようにして整然とさせることができるのか?」という質問が中心になった。予定した時間を15分もオーバーしてしまった。逆に考えれば、それくらい皆この会話を楽しんでいた。18:30 頃に1時間と少しかけてホテルに帰着する。皆、朝が早かったので疲れたらしく、バスの中ではぐっすりと寝込んでしまっていたらしい。

(2) 青グループ・平岡先生

午前中

ゴーシェン小学校 (MD)

午後

フォーリスト・オーク中学校 (MD)

### ゴーシェン小学校

1988 年創立の学校で生徒数は 735 名。1 学年が 5、6 クラスの大規模校である。緑に囲まれた郊外の静かな環境の中にある学校で、敷地は 10.5 エーカーある。ここには幼稚園から小学校 5 年までの生徒が通っている。

1 クラスの人数は 25 人程度。職員は 75 名でそのうち教師が 35 名、残りはメディアスペシャリスト、カウンセラー、清掃員などである。

学校としては特に 1、れている。基礎基本の生徒が楽しく学習できるよの 90 分は基礎基本の時だ。学習が楽しく継続できれば、学習を一生涯続けた、優秀な生徒には賞を与えるような取り組みをして校は州の標準テストで学校だそうである。

小学校のカリキュラム



2 年生の教育に力を入着を第一において、生う工夫している。1 日間にあてているそうきるようにしていれるからだそうだ。ま与えて、向上心が高まっている。ちなみにこの学トップクラスの成績の

はメリーランド州が決

めており、教科書はあくまでも資料として扱っている。

1日の授業の内訳は、音楽1時間、美術1時間、国語2時間、算数1時間、社会と理科のどちらか1時間をおこなうのが標準的で、朝の放送(9:10)でその日の授業や行事の連絡を行っている。放送の内容は5年生が考えているそう。

また、最近では英語以外を母国語とする生徒が増加し、その子どもたちのための英語の授業(ESOL)も行われている。

総合的な学習(プロジェクトオベーション)は2年生から行っている。

参観した2年生の授業では、小グループに分かれて絵本を作りその絵本について論じたり、自分でその日の目標を決めて本を読む練習をしたりしていた。

5年生の美術の授業では、画家の作品の模写をすることで絵の基本を学んでいた。

幼稚園児のクラスは、1クラス20人で5クラスあり、各クラス教師1人、保護者1人がついて絵本を読んだりしていた。

全ての教室にはコンピューターが2、3台あり、本の検索やインターネットを使って調べ物をしたりと十分活用されていた。

図書館はメディアセンターと呼ばれている。そこにはメディアスペシャリストと呼ばれる人がいて、本の管理やコンピューターの管理をしている。また、保護者もボランティアでメディアセンターの手伝いをしている。

PTAの活動が非常に活発で、保護者が授業の補助や補習などをするなど保護者が非常に熱心に学校に関わっているのが印象的であった。

カウンセラーは仲間作りなどをするほかに、日本で言う道徳のような授業もしている。6つの価値項目にそって、各クラス週に1回、6週間で教えているそうである。

教員の採用は日本では各県教育委員会が採用試験を行って決めるが、ここでは採用試験の受験者のリストの中から校長が直接面接し、校長が決めるそうである。

スクールバスが学校に着いた



#### フォーリスト・オーク中学校

1988年創立の新しい学校で、生徒数は約1000名。4つの小学校から生徒が来ている。まわりを林に囲まれた自然の中の落ち着いた環境の学校である。先生は99名である。

この学校は環境教育に非常に力を入れており、その環境プログラムは主にチェサピーク湾の環境についての学習である。チェサピーク湾プロジェクト(Cheasapeake Bay School Project)に近隣の学校9校とともに参加して積極的に活動している。

そのプログラムは特別に時間をとって行うのではなく、数学に時間やリーディングの時間などに関連した事を扱うことで学習している。また、政治を学習したら議会や立法府に働きかけることを実際にしたりもしている。

その他には学校の近所にある森林のフィールドワークや、2泊3日でチェサピーク湾に宿泊学習に行くプログラムを行っている。

コンピューターはクラスに数台あり、授業等で利用している。それでもコンピューターが足りないのので、企業から古くなったコンピューターを寄付してもらい台数を増やしている。

図書館はメディアセンターと呼ばれている。そこにはインターネットにつながったコンピューターが10数台あり、図書館の本の検索や調べものに自由に使えるようになっている。また、校内テレビ放送設備付設されており、そこで毎日朝の放送を行っている。

廊下には林の中に落ちていた葉っぱや動物の骨などを使ったアートなど、生徒の作品がいたるところに展示してある。

生徒は活発でよく発表をしていた。

(文責： 平岡先生)

(3) 黄グループ・都甲先生	午前中	パーク小学校 (MD)
	午後	ブルックリン・パーク中学校 (MD)

### パーク小学校

6:30 にホテルを出発し、7:30 にはパーク小学校に到着。予定より 30 分早いにもかかわらず、副校長のマリーン・マーカン先生の出迎えを受ける。静かな郊外の住宅地の中にあり、自然に囲まれた学校である。早朝より鳥の音が響き渡り、車の音もほとんどしない落ち着いた環境の中にある。早速校内へと導かれ、メディアルームへ招かれる。マリーン先生は、物腰の柔らかそうな、きりっとした感じの方である。校長先生はダイアン・レンジという女性の方で、2000 年の 11 月に FMF の教員交流で日本に研修にきたことがあるとのこと。

#### 校長先生の話

東京、広島、田沼を訪れたことがいまでも忘れられず懐かしい。メリーランド州ボルチモア郡はカニの産地でおいしい。郡全体で 6000 人の小学校の先生と 82000 人の生徒がいる。読解力の育成に力を入れており、2 人の専門の教師をもうけた。5 月の州全体で実施されるテストに、3、5、8 年生がチャレンジする。その結果は公開され、各学校の成績が公示される。学習の基本は読解力にあると考える。カウンセラーとして専属もあり、道徳・しつけ・ガイダンスを行い、道徳などは各クラスを回って授業を行う。生徒は 2 台のスクールバス、あるいは徒歩で登校する。スピーチ専門の先生もあり、傷害のある子どもの教育を行ったり、また養護学級もある。



コンピューター室 実習風景

#### 9:05 小グループに分かれて見学

幼稚園 1 から 31 の数え方、曜日、天気、気温など生活の基本的な知識の学習を行う。教え方もリズムカルでテンポよく進んでいる。子供たちも教師のいうことに素直に反応し、比較のおとなしい。園児からおみやげの首飾りをかけてもらう。コンピュータの授業参観に続いて、音楽の授業では演奏と合唱を聴かせていただき、我々教員も一緒に歌を歌った。体育・美術の授業では、生徒はそれぞれ 16 人ずつでいずれも素直で、教師の指示によく従う。話をよく聞く。しつけが行き届いている様子。かといって萎縮した様子もない。



#### 11:10 質疑

教師 10 人と PTA 1 人で学校委員会を作り、運営等いろいろな検討を行っている。PTA の全面的な協力体制ができており、特に寄付集めなどに成果を上げている。私立学校に宗教関係のものがあらかい多くは公立の学校へ通う。

州のテストは 5 科目が行われ、他の学校の先生が採点する。問題はかなり難しく、合格ラインに達するのは 100 校のうち 1 校のみである。

音楽の授業 「君が代」を演奏してくれました



校長から教職員へのアドバイスとしては、「柔軟性を持とう、組織的に行おう、公平さを持とう、校長を信頼してください」ということでした。

重点項目としては「テクノロジー、読むこと、聞くこと学力の向上」をあげられた。メディアセンターにて食事した。

### ブルックリン・パーク中学校

ブルックリン・パーク中学校に到着。校長先生はブレンダ・ハーベニス先生という。

1954年開校。はじめは高校でスタートし、次に中学校と高校の合わさった学校になり、昨年から中学校となった。学校の施設と公民館的な施設が併設しており、コミュニティーセンター的な役割を果たしている。生徒数601名、教師58名、16人の生徒のグループに対して各教科の担当の教員が割り当てられ、チームで生徒をみていく。グループごとに保護者会があり、生徒の対応家庭との連絡を取る。テストが定期的に行われ、A～Dの評価Aの多い生徒は表彰を受ける。コンピュータ386台設置、各クラスに3台設置し、インターネットを整備している。生徒の諸問題の発生原因は家庭の問題に起因することが多いのは日本と同様である。

#### 12:50 授業参観（理科、音楽、体育、家庭科、技術ほか）

生徒は日本の日常的に見られる様子とほぼ同様で、中学生らしく元気が良い。中学校の教員になる人が少ない傾向がでてきたとのこと。（日本とは反対）

この中学校では生徒の生の姿が見れたような気がする。日本の学生とは基本的には同じであるが、物おじしない点、意思表示がはっきりしている点などを感じず。そういう意味では、我が校の美鈴が丘高校が今から目指す方向性の参考になりそうである。意志決定、表現力、自分の意見・考えを持つこと等見習いたい。ほんの些細なことでも「すみません」、「ありがとう」などとすぐに言葉となり、礼儀正しい面に感心する。



上 集会風景

以上、本日は幼稚園、小学校、中学校を参観した。いずれの学校も私たちを迎えるにあたり大変な準備をしていただき、恐縮するばかりである。国が違えば教育の考え方も方法も変わる。今回の経験は自分にとって大変インパクトの強いものであり、是非今後の参考にしていきたいと考える。

（文責：都甲先生）



右 メディア・ルーム内

(4) 3月21日(水) 午前中 学校視察報告  
 午後 テクノロジー・トレーニング  
 宿泊地: ワシントン D.C.・ウイングダム シティ センターホテル

7:30 待ち合わせ時間に都甲先生が珍しく遅刻したので、部屋に電話する。疲れて寝過ぎたらしい。今日はマクドナルドで2種類のバーガーを食べた。飲み物が2つついてきたので、「2つは要らない」と答えたが、「セットなので……」と押し切られて渡されてしまった。(こんな点が合理的でないように感じた。)

8:30 J.I.C.C. で、学校訪問報告会を行う。誰が報告するかを赤グループでは決めていたが、ジョーンズ享子さんの一言で、「グループのティチャー担当」の仕事になった。彼女は突然に指名することによって、臨機応変さを養っているようである。これも「現地へ行ってから即妙に対応するための布石かな」とも考えた。赤グループはよく頑張ってくれて、一人ひとりの意見が的確であった。途中、バグスプロジェクトの話もされた。

右 バグスプロジェクトの説明  
 左から ジョーンズ氏、  
 グリー・ガンドルフィー氏



昼は JICC の一階にあるランチ喫茶で、宮島工業高校の先生ら(田川先生ら)と昼食を摂る。

13:00 昼からはテクノロジー・トレーニングがあり、2グループに分かれた。美鈴が丘チームはまず岐阜の高山西高校の芝原先生や岡山城東高校の藤本先生などの指導で、「シー・ユー・シー・ミー」というソフトとパソコンに設置するカメラの関係やパソコンとの相性などをノートパソコンを使って実際に試していた。

次に、講義室に戻り、各校のパソコン整備状況やラインの関係、ネット・ミーティングにおける種々の問題点などを取りあげて、各校のテクニク担当の先生を中心に話された。我が校の平岡先生は積極的に一番手に手を挙げて、我が校の状況やいろいろな質問に答えていた。16:30 に今日の行事を終えてホテルに帰る。

テクノロジー・トレーニングで積極的に質問に 応じる我が校の平岡先生

隣はこの研修のリーダーであるジョーンズ氏





18:00 ジョージ・タウンへ三人で行く。(徒歩で30分) もっぱら本屋で各自の興味ある本を購入するべく物色した。その後、ジョージ・タウンのなだらかな坂の頂上まで歩き、雨が降り始めたので近くのイタリアンレストランに入った。このとき、スパゲティを二人分食べて驚かされてしまった。

21:00 小雨の中、歩いてホテルに帰った。

右 カッパ姿の変な日本人  
左から 都甲先生、平岡先生



### \* ワシントン5日目の感想

今日のテクニク・トレーニングによって懸案だったネット・ミーティングの対応の仕方が少し分かったような気がする。すなわち、一番問題視していたのは、やはり言葉の壁である。岐阜の先生方の翻訳ソフトの話も興味あるが、「今年度の末までに、そのシステムが間に合うかどうかむずかしいな」と考えた。それに対して、高山西高校の芝原先生が語っておられた方法が有効だと考える。すなわち、我が校も高校1年生が中心になるので、ネット・ミーティングが円滑にできたとしても、生徒たちの語学力には不安があった。それでチャットを利用して、予想される質問事項や相手側の質問の答えをあらかじめ生徒に聞いておき、それを画面の脇にはりつけておく。そして、質問や答えチャットから引っ張ってくればよいと考えた。

ジョージタウンの印象。古きよきワシントンD.C.の街並みであった。一冊の本を見つけるのに一時もぶらぶらと見て歩く楽しさを久々に味わった。ゆっくり一人で歩いてみたい街である。

(文責: 廣田)



3月22日(木)の教育省訪問後、スミソニアン博物館の航空・宇宙館を訪れる

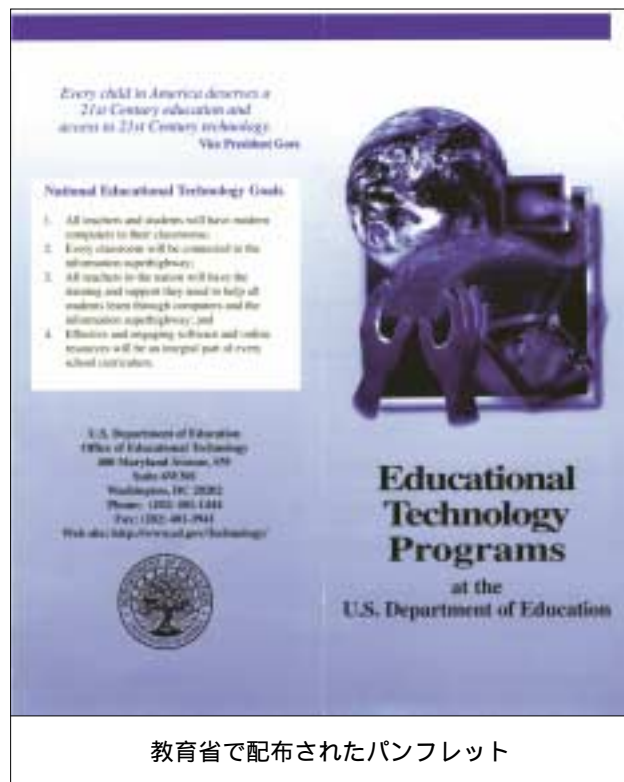
写真はライト兄弟の人類初の飛行機

(5) 3月22日(木) 午前中 教育省訪問  
 午後 スミソニアン博物館視察  
 夜 レセプション(日本大使館にて)  
 宿泊地: ワシントン D.C.・ウイングダム シティ センターホテル

8:50 教育省に行くために、ホテルのロビーに集まる。その後、地下鉄に乗って、ランファン・プレイス(l' enfant place 子供広場)へ行き、それから歩いて教育省へ行く。玄関口で金属探知器を通り荷物検査の後、教育省の職員の話聞く。その中で、今の新しい大統領(ブッシュ大統領)に替わることによって、教育省の管理職クラスの人だけでも300人も移動があり、大変忙しい時期であると告げられた。二大政党の政権下では、違った政党が権力を握ったら、それまでの人たちは一掃されるのだと気づいた。

11:30 教育省内のレストランで食事する。ここでもファーストフードの店のように、皿(紙製)やナイフ、フォークなど(プラスチック製)がゴミとして捨てられる形式になっていた。

その後、我々・美鈴が丘高校チームは皆と分かれて、スミソニアン博物館の航空・宇宙館を訪問する。確かに本物が飾られていたが、自然史博物館に入ったときのような感動はなかった。



教育省で配布されたパンフレット



上 教育省内で開かれたレイモンド・マイヤーズ博士による説明会

左 教育省の玄関前の廊下  
 左から 都甲先生、平岡先生、廣田

16:15 地下鉄でホテルに帰り、一休みする。

17:15 日本大使主催によるレセプションに参加するためにホテルのロビーに集まり、バスに乗る。  
 その際、各州から来たパートナーが来ており、あちこちで歓声が湧いた。我々のパートナー校からは校長のリーさんが来られていた。相手の方が先に我々を見つけ、互いに固く握手をした。大柄でぼさぼさ頭のウェスタン映画から出てきた悪役のようなナイスガイだった。頼れるお父さんのような人だった。驚いたことに、我々三人の名前と顔をすでに記憶しておられた。)

18:00 日本大使館の隣にある旧公邸でレセプションがあった。主催の柳井大使夫妻、フルブライト夫人なども参加された。わたしの方はレセプションルームで用意された飲み物を飲みながら、飲み物を配っていた人に、「今日は飲み物だけなのですか？」と尋ねたら、「食事は隣にバイキング方式で用意してありますよ」と片目をつぶられた。皆が大使の挨拶に聞き入っているときに、わたしの肩を叩くものがいた。先ほどのバーテンダーである。彼の指さす方向のドアが開けられていた。一目散にその部屋に入り、心の中で歓声をあげた。あるわあるわ。寿司、焼き鳥、天ぷら、そば.....etc.etc.。すぐに4人前くらい取って、傍のテーブルの上に並べた。その頃から二番手の人たちが入ってきた。日本人学校の先生や日本の教育に関係しておられる人からたくさん話しかけられた。(明日あたり日本食のレストランへ行こうかなと考えていたが、これで帰国まで我慢できそうである。)ただ、デザートは桜餅はまずかった。ご飯の粉でつくられた饅頭だが、餅だと思ったら餅ではなかった。見てくれだけの桜餅だった。

その後、少し疲れたので玄関横の受付で、スタッフの人と受付係を手伝っていた。21:00 過ぎにはホテルに帰着した。

下 日本大使館のレセプションにて  
 左から柳井大使夫人、フルブライト夫人、柳井俊二大使、F.M.F. プログラム・ディレクターのジョーンズ・享子さん



上 旧日本大使館公邸前にて  
 左 都甲先生、右 パートナー校のリー校長  
 後方の左に F.M.F. のジョーンズ氏

#### \* ワシントン 6 日目の感想

アメリカに来て気づいたことだが、大変な消費社会である。(30 年前に学生で来たときにはそれほど感じなかった。) ゴミを分別している姿をほとんど見なかった。日本人よりもゴミの分別という考えがなかった。海外としては、もっぱらヨーロッパに行くのだが、3 年前のドイツ視察でもゴミを徹底した分別する姿や、ゴミを作らない精神で生活されていた。また、電気の消費にも気づかい、かなり薄暗くなっても明かりをつけなかった。どちらの考えが正論かと尋ねられたら、諸手を挙げてヨーロッパの考えだと答えたい。驚くべき消費量である。ある程度、日本の消費の異常さには気づき始めたが、その上をいっている。一般の人はゴミ問題などをどのように解釈しているのだろうか。確かに、アメリカは国土が広いと言えるが.....。

(文責： 廣田)



(6) 3月23日(金) 午前中 パートナーとともにチーム・トレーニング(JICCにて)  
 午後 パートナーとともにワシントン D.C. 視察  
 宿泊地: ワシントン D.C.・ウイングダム シティ センターホテル

8:00 ホテルのロビーに集まる。4人(都甲先生、平岡先生、リー校長)で、JICCのあるビル1階のランチ喫茶で朝食を摂る。

9:00 日米合同オリエンテーション 4人で講義室の一番前の席に陣取って、農林省のジェリーパーク博士の「土壌」についての講演を聴く。「自然の大切さ、その中でも『土壌』の重要性を強調された。すなわち、土壌が生物たちの寝床であり、故郷である。その土壌を守るためにも、ゴミの扱いに人一倍の注意を払う必要がある。(特に、ゴミの管理には注意を要する。)また、土壌の構築には、水や気候のサイクルを守ることが必要である。エコシステムの原理は、これら全てのものが関連している。同時に、土壌中の有機体を保護しなければならない。(土壌が枯渇状態になる。)土壌再生の構築とは、炭素の量の再構築のことであり、ひいては二酸化炭素の減少にも役立つ」と、語られた。



ジェリーパーク博士の講演

午後からはフリータイムなので、新しい友人になったリー校長を含めた4人で、まずペンタゴン(国防総省)へ行った。(残念ながら、中を見学するためには8:45までに申し込みをしなければならないとのこと。ちなみに、ホワイトハウスなども予約は8:45までらしい。)外から何枚かペンタゴンの写真を撮った後、隣の駅である「ペンタゴンシティ」にある大きなモールで昼食を摂った。その後、昨日教育省へ行くときに降りたランファン・ブレイスを経て、ホロコースト博物館へ行く。ここも特別コースの予約は午前中までにしなければならないとのことだった。博物館の開いているところを見終えた後、ワシントンのどこからも見えるという記念塔まで行く。風の強い日で、少し丘のような状態なので遮るものがない。それで、50本のアメリカ国旗がバタバタと音をたててなびいていた。身体を斜めに傾けても、倒れなかった。16:00にはホテルに帰り着く。

右 ホロコースト博物館のパンフレット

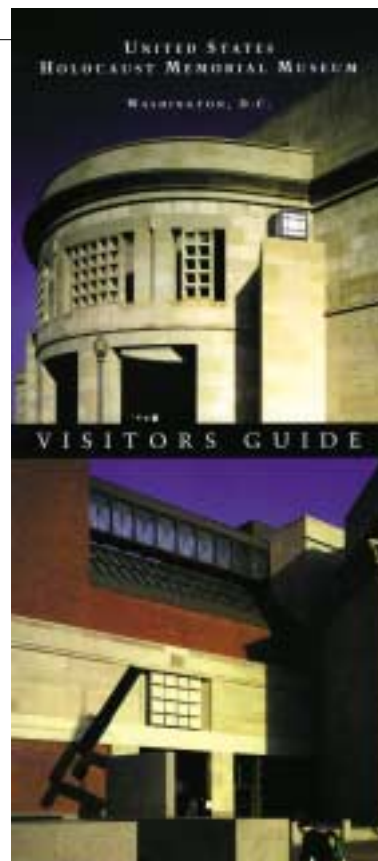


左上 ペンタゴン入口

左から 平岡先生、  
リー校長、都甲先生



左下 ペンタゴン・シ  
ティにあるモール  
左から 廣田、都甲先  
生、リー校長





上 ホロコースト博物館にて  
左から リー校長、平岡先生、廣田



右上 ホロコースト博物館内部

右下 記念塔の周りの50本のアメリカ国旗



19:00 あの「ブラッキーズ」へ4人で食事に行く。21:00まで楽しく語り合い、かつ食し飲んだ。この間、リー校長の愛称を「ビッグボス」とつけた。ちなみに、わたしは「スモールボス」だそう。

21:15 ステーキハウスから帰ると、すぐに荷物を置いてロビーへ行き、平岡さんと落ち合って歩いてジョージタウンまで行く。22:00から始まるジャズコンサートを聴くためである。素晴らしい演奏で、アッという間の2時間だった。このところ、21:00までには寝ていたので深夜0:00を過ぎると、身体が疲れきっていた。それ故、一刻も早くベッドに入ろうと、わき目もふらずに一番でホテルに帰着した。

#### \* ワシントン7日目の感想

年を取ったためか、時差ボケがなかなか抜けない。久しぶりに深夜0:00過ぎまで起きていた。(日本ではいつもそうであった。)

今夜、ジョージタウンで聴いたジャズサウンドは本当にすごかった。日本の日野皓正などのジャズ演奏をよくレコードで聴いたが、彼らの演奏が子供のジャズマンの演奏のように感じた。ジャズという音楽は、やはりアメリカの風土から生まれた音楽であり、黒人たちの叫びなのだろうと気づかされた。この機会を与えてくれた黒人のスタッフの一人に感謝したい。いよいよ、明日一日でワシントンD.C.を離れることになる。この街に少し慣れてきたので、寂しい気はする。

アメリカの公的な博物館などは入場が無料であり、土産物も結構格安で販売していることはありがたい。ヨーロッパは少額だが、しっかりと入場料は取る。まして、日本は高額な入場料を支払わなければならない。

(文責: 廣田)



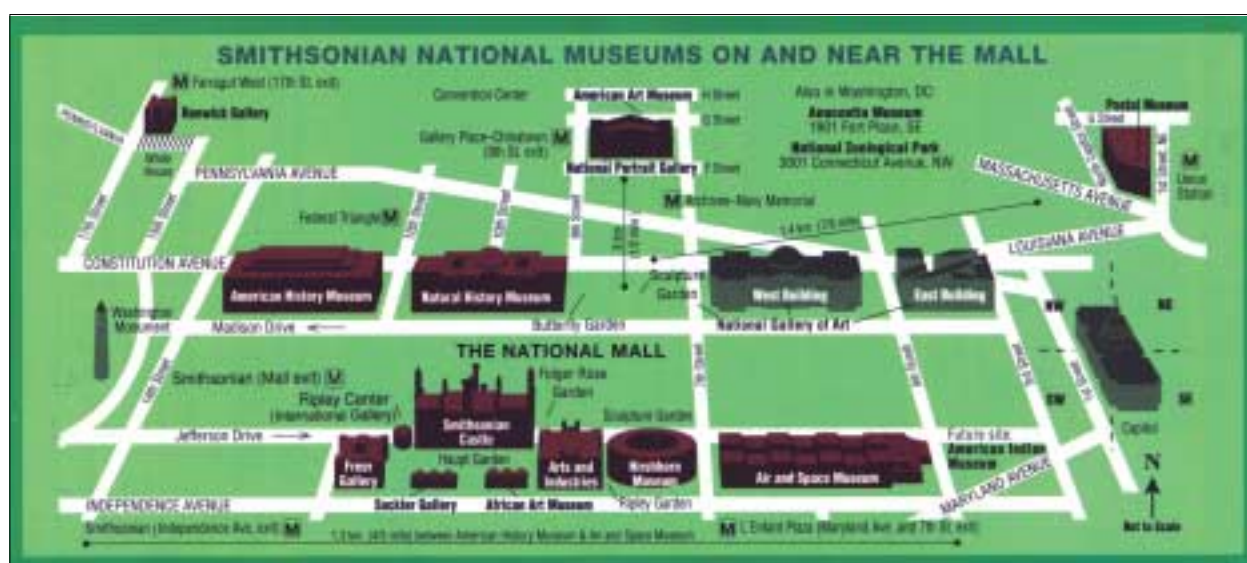
ジャズを聞きに行った Blues Alley の店の前



(7) 3月24日(土) 午前中 パートナーとともにワシントン D.C. 視察  
 16:00 パートナーとともにグループ活動報告(ホテル内会議室)  
 宿泊地: ワシントン D.C.・ウインダム シティ センターホテル

9:00 久しぶりに行事がないので、ロビーにのんびり集合する。セント・グレゴリーホテルの喫茶室で200ドル入りの免許証を拾ってくれたらしいウエイターが「受け取ったかい?」と聞いたので、再びお礼に20ドルを渡した。その後、地下鉄を使ってスミソニアン博物館へ行こうとしたが、途中で、今回のMTPに参加している別なチームに会い、彼らが歩いてホワイトハウスまで行くとのことで、我々も歩くことにする。その後、ホワイトハウスセンターからスミソニアン博物館群の中の歴史博物館に行くことになった。ここは一週間前の日曜日に最初に訪れた場所である。館内では4人が別行動を取ろうということになり、わたしは同じ階のベンチの上で休憩した。

スミソニアン博物館群の見取り図

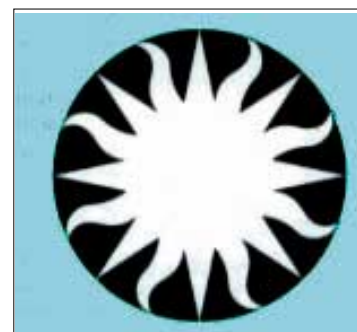


12:15に玄関口で落ち合い、その足でトーマス・ジェファソン・メモリアルまで歩いていく。

風が強くなり、曇り空になって寒い日だった。(今日はワシントン記念塔で凧揚げ大会をやっていた。)上にはおるコートを着てこなかったことを後悔した。一通り見学した後、歩いて引き返そうとしたが、小雨も降ってきたのでタクシーを止めてホテルへ帰る。(ワシントン D.C. で初めてタクシーに乗った。12ドルで、14:15にはホテルにいた。)

その後、明日から使うことになっていた飛行機のボーディングカードの所在が分からなくなっていたので、本格的に捜し始めた。1時間捜したが見つからず、少しあわてた。ここにはないだろうと考えていたゴミの中からその書類が出てきたときは、安堵した。この頃多くなった うっかり症候群 がまた起きてしまった。

スミソニアン博物館のシンボル



16:00 この二日間のパートナーとのグループ活動を各チームが報告する。

一番前に座っていたので、報告が一番手になった。ビッグボスのリー校長から「3人ともナイスガイだ」と締めくくってもらったので、わたしの弁のときに「本当の意味のナイスガイはビッグボスのリー校長だ」と韻を踏ませてもらった。

他のチームは結構この一日半の自由行動を有意義に計画していたらしい。我々のチームは全くの出たところ勝負であり、計画性が欠けていた。本音を言うと、出発前日の19:00まで職員会議や行事検討委員会などで忙しく立ち働き、さらに春休みにグループ研究の総括をする予定であったので、急遽他の人に発表を頼んだための原稿作りや、提出書類を作らねばならなかった。それ故、悠長に観光の下調べなどはやろうにもできなかった。今回の研修も準備は二人（都甲先生、平岡先生）にまかせっきりにしていた。今回のM.T.P.のスケジュールも東京へ向かう新幹線の中で読み、必要な書類と要らない書類の分類も成田のホテルで夜に行い、翌朝要らない書類を宅急便で送り返すという次第であった。校長や教頭にも「飛行機の中でこの3ヶ月間の休息をとる予定だ」と答えていた。同時に、リー校長もアリゾナの人なのでワシントンD.C.には詳しくないようであった。

20:00 「華強酒家」というホテル近くの中華料理屋で夕食を摂る。4人で歓談しながら、友好の絆をさらに強くした。いよいよ明日からアリゾナだ。

#### \* ワシントン8日目の感想

ワシントンD.C.最後の夜である。大切にしたいと思いつつも、いつの間にか寝ていた。当地は首都であり、交通の便は本当に良かったが、アリゾナはどんなところだろうという関心と不安が同居している。このワシントンD.C.も国際理数コースの研修旅行に組み入れたいと考えたが、どうだろうか。心残りなのは、満開の桜が見れなかったことである。残念！（あと1・2週間で満開になるはずだが.....。）

今朝のテレビのニュースで、日本の広島のことが出てきて驚いた。芸予地震が起きたとのこと。何でもわたしの家がある呉市が被害の中心とのことですので電話をする。すでに半日過ぎており、幸運にも電話がすぐにつながった。地震当初はかからなかったとのこと。家の被害は全くないとのことので安心した。（しかし、帰国して分かったことだが、呉市の周辺部は多くの被害が出ており、高台に家を建てた友人のうち、二家族の家が半壊であった。）

（文責： 廣田）



**LOCAL ATTRACTIONS**

- Close to Loop 101 and I-17 Freeways
- Arrowhead Towne Mall
- Over 30 golf courses nearby
- Fiesta Sports Complex; San Diego Padres and Seattle Mariners spring training
- Phoenix International Raceway
- Challenge Learning Center of Arizona
- Downtown Glendale "Arizona's Antique Capital"

**FOR RESERVATIONS CALL TOLL FREE:**  
**1-877-9TALAVI**  
 1-877-982-5294  
 3511 West Bell Road, Glendale, Arizona 85308  
 602-996-4900 • FAX 602-996-4901  
 www.talavi.com • info@talavi.com

**INN TALAVI**

アリゾナ州のグレンデールの宿泊所となった  
タラビ・ホテルのパンフレット

## 6. パートナー校（Maya 高校）との連携 3/25 ~ /30

(1) 3月25日(日) 美鈴が丘高校チームはアリゾナ州へ移動  
 宿泊地： グレンデール・タラビ イン泊

4:00 昨夜は早めに寝たので、早く目覚める。荷物を片づけたり、風呂へ入ったりして7:30 になった。窓を開けると、夏の朝のような清々しい涼気が部屋の中に入ってきた。今日も晴れて真っ青な空である。日曜の朝なので静かな街のたたずまいである。

7:45 チェックアウトして、8:00 ジョーンズ氏およびMTPのスタッフの人たちに見送られて、タクシーでワシントン空港（ヴァージニア州）へ向かう。

10:00 UA609 便でまずシカゴへ向かう。一時間半後にシカゴに到着する。前のように雪はなかった。その後、UA1569 便に乗り継いで、フェニックス空港へ向かう。

着陸前くらいから、機上から地上を見下ろしたが、赤茶けた大地が広がり、川らしい跡が多数見られたが、どこにも水が流れている様子がない。不毛という言葉が正に当てはまる大地の様子だった。日本のときから暑いと言われていたが、最後まで感覚的に信じなかった。

15:00 飛行機が着陸して一歩外に踏み出したとき、「これは日本の夏の夕方だ」という錯覚におちいった。早春の肌寒い気候から日照の強い真夏の気候へ、わたしの脳の中も混乱を起こしていることだろう。

ワシントンD.C.以来、行動をともにして来たリー校長ともフェニックス空港で別れ、シンディーの車でグレンデール市のタラビホテルへ向かう。いよいよ通訳無しの日々が始まった。思った以上によく聞き取れるので安堵した。つよい南部訛やイントネーションがあるのではないかと危惧していたからだ。

ホテルでチェックインするときに、アメリカがカード社会であることが少しずつ分かってきた。すなわち、「カードだとノーチャージだ」と言われ、都甲先生に無理を言って支払いを頼んだ。さて、わたしの泊まる部屋はこのホテルで最も広い部屋らしい。居間、台所、トイレ付きの化粧室、ベッドルーム、さらにトイレ付きの浴室がある。目の前にはプールまである。わたしの居間を会議室兼朝食の場所とした。三人（都甲先生、平岡先生、シンディー）を我が部屋に呼び、10周年誌と昨年度の卒業アルバムをプレゼントとして渡し、それらの写真を見ながら我が校のことを説明した。

18:30 シンディーの提案で、メキシコ料理の「マケイヨズ」へ行き、タコスやエンチラダスを食べる。アルコール好きな平岡先生はマルガリータや地元のビールに挑戦していた。



メキシコ料理店のナブキン  
 についていたマーク

#### \* アリゾナ1日目の感想

昨日のワシントンD.C.の天候は肌寒く早春の温度であったのが、アリゾナのフェニックスでは真夏であった。アメリカの国土の広さを思い知らされた。考えてみたら、北海道と沖縄の距離を考えたら同じことかとも思った。暑い土地だが、乾燥しているので過ごしやすい土地である。ただ街を一歩出ると水不足につよいサボテンが灌木くらいしか目につかなくなる土地だと感じた。

50歳になってから、時差ぼけが今も取れずに、苦しんでいる。それ故この旅行中は、宿へ着いたら1、2時間の昼寝はいつものことである。夕食後はすぐに夢の中に直行だった。（いつも22:00前に寝ていた。日本では午前1時に寝ていたのに……。）（文責： 廣田）



(2) 3月26日(月) 午前中 パートナー校(マヤ高校)訪問  
午後 大学訪問を中止し、休息  
宿泊地: グレンデール・タラビ イン泊

3:30 起床 まだ時差ぼけが続いているのだろうか。朝まで日誌を書いたり、グループ研究のまとめを作っていた。

7:00 わたしの部屋で三人で朝食を摂る。部屋の外のドアの下に朝食ボックス(パンが1つ、カップケーキ1つ、リンゴ1、ジュース1本、クリームチーズ)と新聞が置いてあった。

8:00 シンディーとともにマヤ高校へ向かう。(高校へ向かう途中、シンディーの解説付きだった。すなわち、ずっとこの街のことを説明していた。)

マヤ高校に到着してから驚くことが立て続けにおこる。

まず、学校規模の小ささにも驚かされた。外観は平屋建ての何かの事務所のように見える。内部は10教室くらいあり、校庭は25メートルのプールくらいの大きさであり、下はセメントがはげた状態で遊具は全く無く、ただ高さ3mくらいの塀があるだけである。(監獄の中庭にあるような無機質な塀)

また、リー校長には会えたが、挨拶も上の空で「どうしたのかな?」と思っていたら、今朝壁に的を書き、それに向かって銃を発射した生徒がいたらしい。その対応に追われていた。

シンディーとリー校長は「ここの生徒の家庭があまりにひどすぎる。麻薬やアルコール中毒などが家庭にはびこっている環境で、暴力なども日常茶飯事だ」と言っていた。これでは大坂校長の願っていたような姉妹校にはなることはできないと断念した。

ただ感心したことは、シンディーもリー校長も生徒全員の名前を知っているらしい。廊下などで出会う生徒には名前を呼んでいた。生徒との信頼を得る最適な方法だが、実行することはなかなかむずかしい。

12:00 昼食に「アロウ・ヘッド」というモールへ行き、土産を買い、フードコート(食べ物広場)で昼食を摂る。

14:30 アリゾナ州立大学のウエスト・キャンパスに行く予定でいたのだが、身体の調子がよくないこともあり、無理をせず急遽休みにして15:00にはホテルに帰り、休憩をとる。

18:00 歓迎レセプション マヤ高校とレオナグループの主催により、我々のためのレセプションを開いていただいた。レオナグループの管理職の方々やマヤ高校の先生方と歓談する。レオナグループの人々は1時間くらいで帰られた。あとはマヤ高校だけの先生なので、本当に気楽にジョークが飛び交い、笑い声が絶え間なかった。20:00には宴も終わり、21:30までわたしの部屋で今夜の感想を三人で述べあった。



右 マヤ高校の玄関前  
平岡先生



下 茶色の塀の向こう側が中庭



左 アロウ・ヘッドのモールの玄関  
左から 平岡先生、都甲先生、廣田



下 レセプションにて（タラビホテル）  
左から レオナグループのひと（フューチャー・シティの書類を渡すように依頼される）、マヤ高校のリー校長、シンディー、廣田、平岡先生



左 レセプションにて  
左から パートナーのクリス・ウッズ、レオナグループの二人、マヤ高校の先生、廣田平岡先生

## \* アリゾナ 2 日目の感想

マヤ高校とレオナグループの関係がよく理解できなかったもので、3人よれば文殊の知恵とばかりにレセプションの後で話し合った。「マヤ高校はパブリックスクールと聞いていたが、レオナグループという教育グループの傘下に入っているチャータースクールのような存在かも知れない」と平岡先生が言われた。彼はカウンセリングの分掌で長くやってきたので、この種の学校の存在を知っていた。アメリカでは、住民の要求があり署名をある程度集めれば、簡単に学校を開くことができるとのこと。また、レオナグループのような特別な教育営利団体がバックアップしてもよいのだそうだ。ちょうど、日本の学習塾の大型判と考えればよいとのことであった。チャータースクールのことに関して、日本へ帰ってから調べ直してみたいと考えている。

（文責： 廣田）

(3) 3月27日(火) 午前中 パートナー校(マヤ高校)訪問(コンピュータールームで協議)  
午後 マヤ高校長と会食(ドイツ料理)・グレンデル市内を見学  
宿泊地: グレンデル・タラビ イン泊

5:00 起床 7:00 三人で朝食を摂る。

8:00 ホテルにシンディーが迎えに来て、マヤ高校へ向かう。午前中は本格的にマヤ高校を教育視察する。(昨日のレセプションで知り合い、歓談した後だったので、お互いが緊張せずに笑顔で楽しく視察をし終えた。やはり教師は教室の顔が本当にすばらしい。)今日の視察中にコンピューター・ルームで、サラという少女と赤髪の少年がつくったホームページを見せてもらう。一年後に、この部屋と我々の学校のコンピュータールームがネットミーティングでつながるかと思うと感慨深く、またその日が待ち遠しく感じた。



コンピューター室で各自がつくったホームページを見せてくれたサラと赤髪の少年

昼はリー校長、シンディー、そして我々三人とで、グレンデルのアンティーク街にあるドイツ料理店(ハウス・マーフィーズ)で食事する。(ザウワークラフト、ポテト添えのシュニッツエルン)

午後は昔懐かしいアンティークの街々を視察する。何でもアメリカのアンティーク街の中では5本指に入ると説明された。ただし、40～50年以後ものが中心である。最後に、この街の文化センターを訪れた。そこでグレンデルの写真集をはじめ多くの土産物をいただいた。同時に、広島からこの街の文化センターを訪れたのは初めてのことだと言うので、センター内に飾られた世界地図の日本の広島市の位置に平岡先生が代表して、赤い小さなまち針を刺した。(写真を参照)

また、ビーズ博物館では、マヤ高校生の作品が飾られているのを見る。次に、キャンディ工場やネイティブ・アメリカンの物品を扱っている店へと回った。

その後、シンディーは連日我々の案内役で忙しいだろうからと16:00にはホテルに送ってもらったとき、夕食は我々で何とかする旨を告げて、彼女を解放する。



ホテル近くのスーパーマーケットで、スイミングウェアを買って、今年度の初泳ぎをしてしまった。3月に屋外プールで泳げるとは思いもしなかった。

19:00 我々の泊まっているタラビホテルの道路を隔てた向かいにあるバーベキュー屋で夕食を摂り、食事後はわたしの部屋でコーヒーを飲みながら歓談する。



左 グレンデルのアンティーク街にて 左からシンディー、平岡先生、廣田、都甲先生、リー校長



## マヤ高校の授業風景



右上 ヴェネッサ先生の国語授業  
緑の服を着ている人物（ヒゲの人物）がマヤ高校の M.T.P. の研究者クリス・ウッズ博士



上 ジム先生の歴史の授業



右 ペンシルヴァニアなまりのハル先生の国語の授業

## \* アリゾナ 3 日目の感想

今日もマヤ高校の教育視察をしたが、昨日ほどのショックはなかった。それよりも、生徒らの鋭かった目つきが愛嬌を蓄えるようになり、笑顔に変わった姿を見るにつけ、本来生徒はどこでも同じだということを思い出した。こちらが緊張すると、生徒の方もそのように反応する。すなわち、彼らは我々教師の鏡ということになる。別な授業で罰を食らっていた赤髪の少年も、コンピュータールームで見ると、一見ぶっきらぼうに見えていた少年が生き生きした表情を見せた。3 限目にコンピュータールームで会ったサラという少女は真面目なコンピューター好きな女の子のように感じた。シンディーの部屋に戻って何気なく窓の外を見てみると、一人帰宅している生徒がいた。それがサラだった。別に授業が終わった様子もないのだが、どうしてだろうと、分からないことだらけのマヤ高校であった。

マヤ高校にはもう一つ特筆することがあった。中間の休みになると、ほとんどの生徒が庭の中に出てくる。同時に、その庭の一角にある扉が開かれる。外には2台のメキシコ人の小型バスが待機しており、食べ物や飲み物を生徒に売っていた。（10時のおやつの雰囲気であった。）（文責： 廣田）

(4) 3月28日(水) 午前中 グレンデール警察署を訪問(報道関係者)  
 午後 フェニックス市内を視察(民族博物館など)  
 夜 ローハイド(テーマパーク)で夕食  
 宿泊地: グレンデール・タラビ イン泊

8:30 三人で朝食を摂る。

9:30 シンディーが迎えに来て、グレンデールの警察署および交通管制センターを訪問する。(プレスも来ており、取材を受ける。)残念ながら、その記事ののった新聞を見ることはできなかった。その後、フェニックス市の下町へ行き、まずハード博物館(ネイティヴ・アメリカン博物館)で個々に閲覧した。その後、中庭にある食堂で昼食を摂る。途中、アメリカン・エクスプレスで換金したが、1ドル=140円近い換算率に恐れおののいた。



交通安全管理センター内  
 左 左から センターの案内係、廣田、平岡先生、シンディー



上 グレンデール交通安全管理センターおよび警察署のあるビル

上 警察署内を案内してくれた警察官たちとともに  
 前面左から 都甲先生、廣田、平岡先生



右 警察部長に捕まえられた犯人たち  
 左から 警察部長、都甲先生、平岡先生、廣田



15:00 「ローハイド」というテーマパークを訪れ、ここで18:00まで自由行動。

その後、わら馬車で少し離れた野外ステージへ向かう。素晴らしい夕焼けを見ながら、カントリー・ウェスタンを聞き、ショーを楽しんだ。満天の星のもとで本格的な西部劇風のステーキを食べた。

22:00 頃そこを離れ、23:00 頃ホテルに帰着する。楽しい夜であった。これを国際理数コースの研修旅行に入れるべきだと考えた。

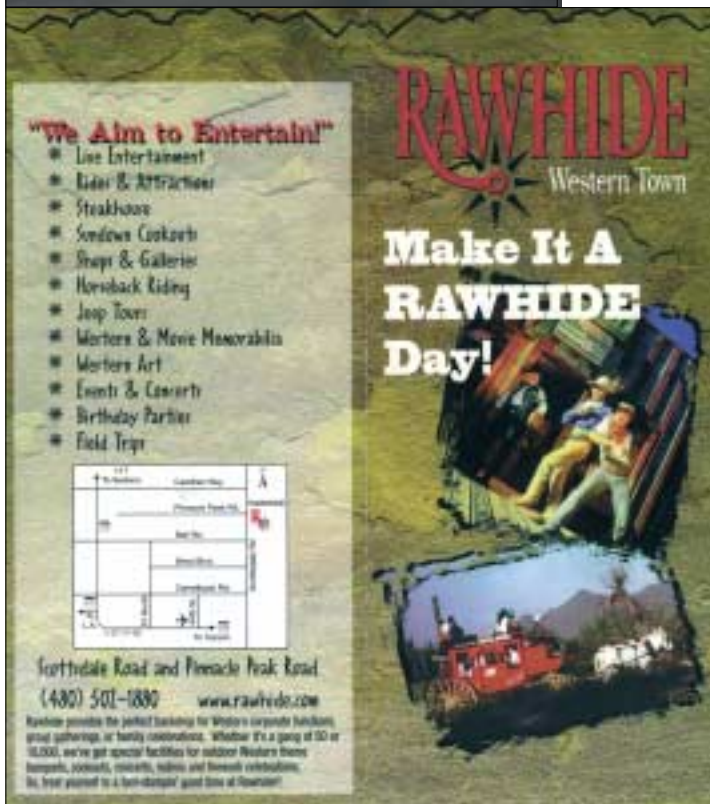


ハード博物館（ネイティブ・アメリカンの博物館）  
左から 平岡先生、都甲先生、廣田

\* 自分たちが望んだこととはいえ、明日のグランド・キャニオン行きのため翌朝は4:00に起きねばならない。最後の苦行である。（これは今年度4月から我が校に新コースである国際理数コースが設置された。その研修旅行をヒューストンのナサとアリゾナのグランド・キャニオンを予定している。その下見のためにシンディーに無理にキャニオンを訪問できるように依頼した。）



左  
テーマパークに向かう途中、フェニックス市のシンボルの山「ラクダ山」を通る（ラクダが伏せたような形をしている山）



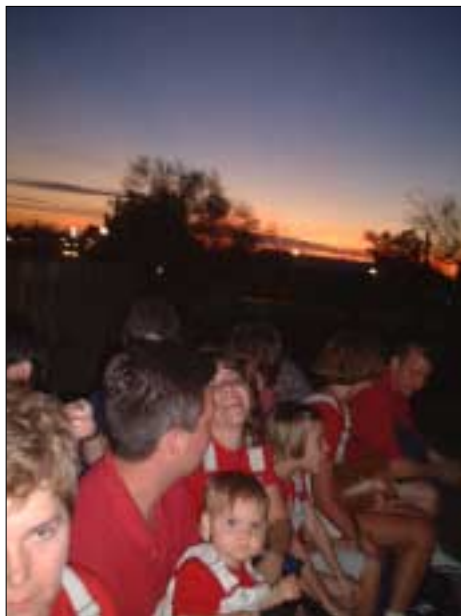
左  
ローハイド・テーマパークのパンフレット

右 ローハイドの食事チケット



ローハイド・テーマパーク入場券





上 テーマパーク「ローハイド」の夕焼け

左 食事のために会場に向かうわらを積んだ馬車に乗った参加者たち

## \* アリゾナ 4 日目の感想

「ローレン、ローレン、ローレン……」という子供の頃にTVで聞いた「ローハイド」の曲が入口に流れていた。他の二人（都甲先生、平岡先生）は10歳くらい歳が離れているので、そのようなTV番組は見えていない様子であった。我々の世代（団塊の世代）は古きよきアメリカのホームドラマの時代であった。「パパは何でも知っている」、「ルーシーショー」、「アンディ・ウィリアムズショー」や日本の「兼高かおる世界の旅」などを見て、欧米に憧れを抱いたものだ。

このテーマパークは東京ディズニーランドなどの大型テーマパークからすると、田舎じみた小さなものだが、手作りのような温かさを感じた。お化け屋敷や機械仕掛けの牛乗り装置などにも童心に返って挑戦した。わたしの前に牛の背にのっかった0歳と思われる人などはすぐに跳ね飛ばされた。それで、わたしは「50歳だから、お手柔らかに」と、言ったのがきいたのかどうか、何とか落ちずに乗り切った。（平岡先生も挑戦する。）都甲先生はロッククライミングに挑戦していた。

野外の晚餐は素晴らしかった。夕焼けを背景にサボテン群が黒い切り絵のように浮かび上がった。あるサボテンの上にフクロウを見つけたときは、何か得をしたような気がした。自然が織りなす蒼穹のテントは本当に素敵だった。よき思い出がまたひとつできたとシンディーに感謝した。

（文責： 廣田）



上 テーマパークの役者とともに（彼女はピストルだけでなく、鞭の名手でもある）  
左から 廣田、平岡先生、役者、都甲先生



右 デザートのひとつのマシュマロ焼き  
（ひごの先にマシュマロをつけて焼く）

(5) 3月29日(木) 午前・午後 ウォルナット・キャニオン、グランド・キャニオン、  
オーク・クリーク・キャニオン視察  
宿泊地： グレンデール・タラビ イン泊

4:00 起床（身体中が疲労を訴えている。）

5:00 シンディーがホテルに三人を迎えに来る。真っ暗の中を出発する。帰るときも、このような暗さだろうと想像する。途中の風景は全く見えなかった。

8:00 フラグスタッフに着き、マクドナルドで朝食を摂る。

8:30 ウォルナット・キャニオンに到着する。高度が高いためか、サボテンは見られず、肌寒かった。谷を望む頂上の位置が渓谷への入口であった。そこから谷の中程まで降りると、谷の中央にそびえるような岩の尖塔へ渡ることができた。その尖塔部分にもネイティブ・アメリカンの住居跡がたくさん残っていた。予想以上に興味深い場所であった。



フラグスタッフの町に近いサンフランシスコ・ピークというスキー場もある山

9:30 グランド・キャニオンに向かって出発する。

12:00 前にグランド・キャニオンに到着する。大パノラマで感動するところだとは聞いていたが、予想外の大きさに圧倒された。自分たちの立っている場所が現実の場所で、後ろの風景は全て大きな絵はがきになってしまうような色合いであり、景色であった。

15:00 まで自由行動で、谷の5分の1くらいまで降りてみたが、それから引き返してみると1時間半を使っていた。（シンディーは別行動であった。）三人で昼食を摂った後、二人とも別れ、ひとりでぼんやりと過ごす。

その後、オーク・クリーク・キャニオンに向かう。グランド・キャニオンがそれ以上にすごい景色だったので、期待もせずに現地に着いた。沈降した地形だと言われ、そうなのかと頷いただけである。ここの凄さは30分後に現れる。すなわち、谷にそってフラグスタッフへ引き返す途中に、次々と赤い砂岩の自然が彫刻した奇岩が現れ出してから、「ヘー」とか「ハァー」とかの連続であった。（サラビ通過）

途中、レストランに寄るのは止めて、明日出発の荷物整理が気になり、一路グレンデールへ向かう。

19:30 頃ホテルに帰着する。20分ほどプールで泳いだ後、20:00 からわたしの部屋で夕食を摂る。（断ったはずの朝食ボックスが今日も置いてあったので、それを夕食代わりにした。23:00 過ぎまで荷物を整理した。いよいよ、明日はアメリカを発つ。）



二日間大いに活躍したシンディーの車

## \* アリゾナ5日目の感想

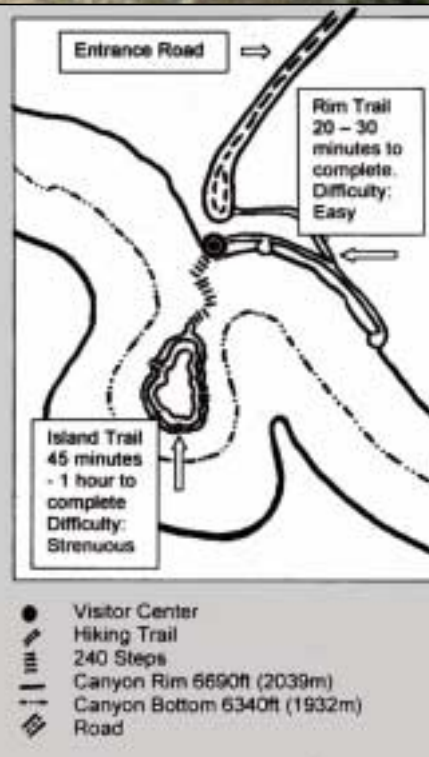
### キャニオンへの案内

シンディーは実に10数時間運転しっぱなしであった。しかし、わたしもそれなりの苦行は味わった。彼女一人だけで運転して、皆がスヤスヤ睡眠をとってたら悪いと思い、時々話しかけていた。しかし、二人（都甲先生、平岡先生）に言わせると、「結構、いびきをかいていましたよ」と言われ、気恥ずかしかった。同時に、今回の旅行のお礼はどのような形で返せばよいかと思案した。（昨日以来、ウッズ家にあまりに迷惑をかけたと感じたからである。）日本へ来られたときは努力したい。

スカンクの臭いというのを2回ほど経験した。カメムシの臭いを濃くしたような臭いが漂っている所を車で2度ほど通過した。

（文責： 廣田）



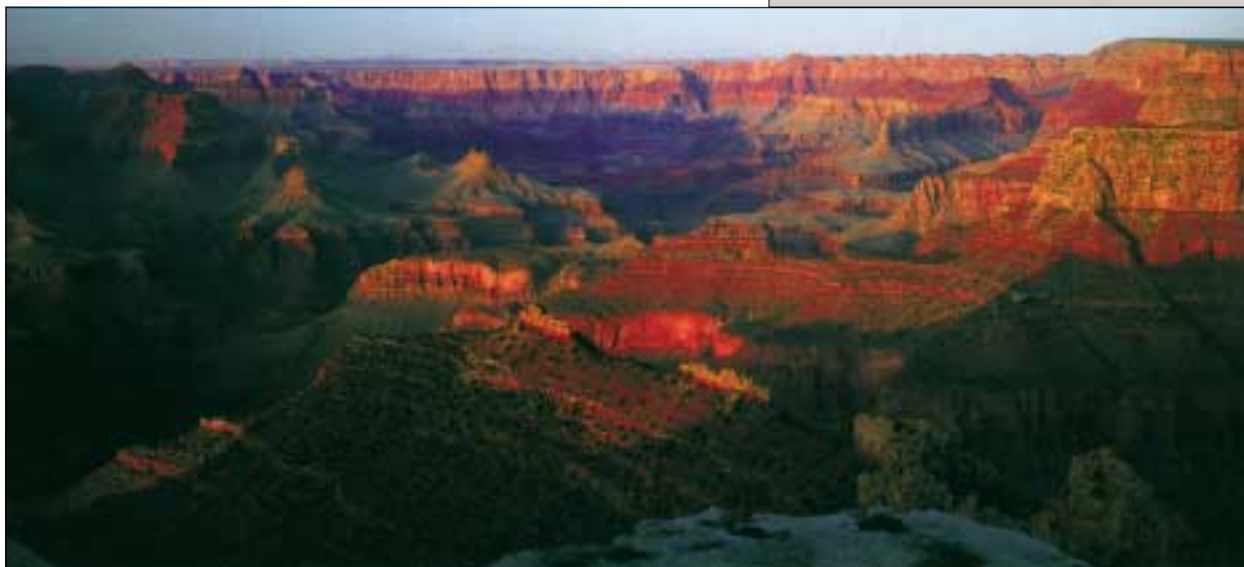


左上 ウォルナット・キャニオンの展望台  
右上 そのキャニオンのネイティブ・アメリカンの谷間の住宅  
中左 谷間にそびえる尖塔状の島の中道  
中右 谷間にそびえる尖塔状の島の地図

## WALNUT CANYON

(ウォルナット・キャニオン)

下 グランド・キャニオン全景（昼間）







左 グランド・キャニオンで会ったおばあさんとともに  
左から 廣田、都甲先生、おばあさん、平岡先生



## GRAND CANYON

（グランド・キャニオン）



上 グランド・キャニオン  
左から シンディー、都甲先生、平岡先生  
右 グランド・キャニオンにて 廣田



下 グランド・キャニオン全景（夕暮れ）





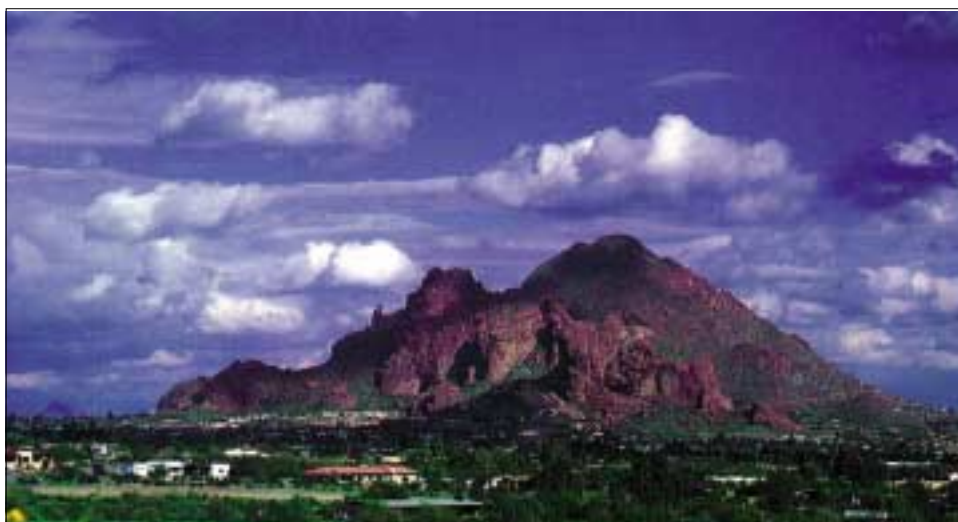
上 オーク・クリーク・キャニオンにて 廣田



オーク・クリーク・キャニオンを

川沿いに降りていくと、次々の写真のような奇岩が現れて、  
目を楽しませてくれる

## OAK CREEK CANYON (オーク・クリーク・キャニオン)



左  
アリゾナ・フェニックス  
のシンボルであるラクダ  
(の背) 山



## 7. 帰国および報告会 3/30 ~ 4/1

- (1) 3月30日(金) 宿泊地: 機中泊  
3月31日(土) 宿泊地: パシフィックホテル泊

4:30 起床 日誌をついたり、絵はがきを書いたり、風呂へ入ったりした。

7:00 朝食を三人で摂る。

8:00 ホテルをチェックアウトする。

8:15 疲れも見せず、シンディーが登場。一路、フェニックス空港へ向かう。

フェニックス空港で搭乗手続きをするとき、都甲先生の大型荷物が8ポンドのオーバーで、危うく280ドル支払う羽目になった。シンディーが機転をきかして、荷物を出させて、OKになったが.....)ここで、一週間お世話になったシンディーとも別れることになった。(グレンデールの文化センターを訪問したとき、リー校長から翌日会えると言われたので、別れの挨拶もせずに別れてしまったのが悔やまれる。)'今回の旅行で最も良かったことは、アメリカにリー校長とシンディーという友人を得たことだ'と、空港に送ってもらう車の中で、シンディーに伝えた。

10:40 UA2359でフェニックスを発ち、サンフランシスコ空港へ向かう。(30分ほど飛行機が遅れた。)

13:00 UA837でサンフランシスコ空港から日本の成田空港へ向かう。この間、機内では2回半食事がでた。

17:30 無事に、成田空港に到着する。(予定では16:44で、45分ほど遅れた。)空港のゲートを出たところで、大型荷物を広島に送ったりしているうちに時間が過ぎた。19:00のJRの成田エクスプレスで品川駅へ向かう。21:00前にJR品川駅前にあるホテルパシフィック東京に到着する。



帰国の際の飛行機チケット

左 フェニックス～S.F.

右 サンフランシスコ～成田

21:00 三人ですぐに夕食を摂る。久しぶりに日本食(ラーメンと寿司)で三人で慰労会をする。

## M.T.P.2001に参加するマヤ高校のパートナーたち

<b>マヤ高等学校</b> <b>MAYA High School</b> <b>5849 West Northern Glendale AZ</b> <b>Phone 623-930-0465</b> <b>Fax 623-930-0468</b> <b>AZ 85301</b>	クリフォード・R・ウッズ	Teacher
	Dr. Clifford R. Woods	愛称: クリス
	シンシア・ジョーンズ・ウッズ	Tech. Coordinator
	Ms. Cynthia Jones Woods	愛称: シンディー
	リー・チャールズ・ディーレンバック	Administrator
	Mr. Lee Charles Dillenbeck	愛称: リー(ボス)



(2) 4月1日(日)午前中 M.T.P. 報告会(ホテル内研修室)

4:30 起床 日誌をつけたり、書類を片づける。

7:00 ホテルから不要の書類などを広島に送る。

8:00 M.T.P.の報告会開始(朝食の代わりに、軽食(菓子パン)と飲み物が会場に用意されていた。)

どのチームも貴重な体験をしているようで、楽しい報告会であった。半分くらいのチームはプレゼンテーション用の画面を使いながら、報告を行った。

2回のコーヒープレイクの後、

11:30 残念ながら、我がチームはプレゼンテーションの準備を怠っていたため、最初にわたしが8分ほど使って今回の旅行の様子を述べ、あとで都甲先生と平岡先生が1~2分述べた。(予定の10分間を軽くオーバーしてしまった。やはり、口で伝えるというのは手間がかかる。)(オフィスのプレゼンテーション用のソフトであるパワーポイントくらいはマスターしておくべきだったと後悔する。)



\* 各チーム、いろいろな面白い体験をされたようで、それを今後の教育活動に生かそうとする気概や気迫に満ちていた。また、各チームともパートナー校を見たおかげで、M.T.P.の仕事に対する覚悟と、自信ができたようであった。

12:30 全てのチームの報告が終わり、いよいよ解散となった。(わたしはもう一日残ることになる。)

下 日米教育委員会(フルブライト・メモリアル基金)のマーク



日米教育委員会 フルブライト・メモリアル基金  
〒100-0014 東京都千代田区永田町 2-14-2  
山王グランドビル 416号  
TEL: 03-3580-3240 FAX: 03-3580-0488  
E-mail: fmf@jusec.org



今回の研修中に日本へ電話をかけるときに重宝したテレホンカード

これは同じ M.T.P.2001 に参加された釧路市教育委員会の梅本宏之さんから売っていただいた(この一枚でこと足りた)

## 8. おわりに（あとがき）

報告書が5月11日の時点で、やっと完成の目処が見えた。一応、この「あとがき」を打ち終えれば、完成である。ただし、今回のコンピューター処理は、後半に来てバグ（ストップ）の連続だった。コンピューターの環境が悪く、コンピューターとのだまし合いだった。（コンピューター内のメモリが少ないのが原因だと考える。）「ページ・メーカー 6.5 J」というDTPソフトを使った6番目の作品である。それ故、報告書をつくることは簡単だと考えていたが、思わぬ落とし穴が待ち受けていたものだ。

さて、今回の旅行ほど自分の体力の無さを情けなく思ったことはない。すなわち、旅行中も帰国後も時差ボケがひどかった。そのため、4月25日までぼんやりと過ごした。すなわち、提出期限である5月7日の10日間前くらいになって、やっと重い腰があがった。4月末から5月の上旬にあるゴールデン・ウィークを使えばと考えていたが、5/1～/3の野外研修（江田島研修）では思った以上に忙しく、仕事があつた。はかどらなかつた。

報告書を書いていると、今回の研修場面が走馬灯のように浮かび上がってくる。2・3月は年度末の慌ただしさの渦中にいて、とてもMTPのことには頭が廻らなかつた。さらに、グループ研究の論文提出と発表が近づいてきたので、忙しさが倍加した。

本題に入ろう。成田のホテルに着いて、その日までに渡された書類に目を通すことができた。MTPの目標を生物・地学の研究を主体とする教育活動と考えていた。しかし、それは多くの目標の一つであつて、実際はネット・ミーティングなどを通して日米の生徒が交流をもち、国際性を養うというメソッドではないかと気づいた次第である。すなわち、各パートナー校の土地柄「環境」を理解することにより、その土地の住民の生活を理解する。このことは小さな単位の国際理解となる。さらに、実際に「環境」の研究を通して数値や結果をつけることにより、具体的な理科研究の仕方を学ぶ。さらに、ネット・ミーティングで交流することにより、外国語の必要性や実際の応用をする。さらには、現地に知り合いができることにより、観光旅行としてのアメリカではなく、実際の国としてのアメリカを理解することにより、この研修の目的があるように思える。

すなわち、異文化体験を「環境科学」というものを通して、学ぶことに主眼があるように思える。また、教師側もこれらの異文化体験を通して、各先生の教育指導や国際性を培うことを目的とした研修だと考える。

ワシントン D. C. では時差ボケと戦いながら、二日間の教育視察をこなし、パソコンによるネット・ミーティングのトレーニングや、環境の「土壌」に関する講義、さらにやつぎばやに様々な課題や報告があつた。さらに、その間に日本大使によるレセプションや教育省を訪問するなどのイベントも設けられていた。その盛りだくさんと思われる行事を皆たんたんとこなしていかれた。さすがに、生え抜きの集団だなと感心した。また、M.T.P. のスタッフの陰の力に気づき、大変感謝した。我々、参加者は与えられたものを日々こなしていけば良かったが、準備には膨大な人力と時間が必要であつたであろうと想像がつく。

ワシントン D.C. 最後の3日前からは、さらにパートナーとの交流のため、つたない英語を駆使して互いが相手を気遣う心配りができたことは、さすがに仕事をしたという気持ちになった。交流の場を白けさせないようにするため、会話をつなぐという心配りと緊張感は全員が感じたことだし、大変な労力がいったと思う。実際、夕食後に一人になると、すぐに疲れがでて、前後不覚に夢の中へ直行であつた。

また、パートナー校では、また違う環境であり、あまりの気候の変化に戸惑った。すなわち、早春のワシントン D.C. から真夏のアリゾナへの転進であつた。さらに、ずっと述べている時差ボケのために、この年でよく身体がもつと、我ながら自分の体力に感心してしまった。現地の英語は何とか理解できたが、交流の場を大切にするという気配りには、思った以上に心労があつた。一人ならばもう少しスムーズにやるやりようもあるが、三人および相手（パートナー校の面々）もいる中での活動で、自分自身には気づかぬ緊張感が持続した。実際、帰国して疲れが取れて、本来の仕事にかかれたのが三週間後であつた。このように普通の調子に戻るのに三週間もかかったのは初めてのことであつた。二年半前にド

イツへ教育視察をしたが、こんなに疲れを覚えなかった。つくづくと年を取ったなど、体力の無さを実感した。

では、「今回の研修が楽しくなかったのか？」と言われたら、答えは逆である。多くの素晴らしい友人ができたことは収穫であった。皆、前向きな考えをもった人たちばかりであり、話の内容も研究・コンピュータだけでなく多岐にわたり、楽しくかつ有意義な時間が過ぎていった。

また、パートナー校のパートナーを初め、多くのアメリカの友人をもち得たことも、この M.T.P.2001 に参加したおかげである。同時に、日本大使館や教育省訪問、アリゾナでのいろいろな関係者との出会いも嬉しい思い出である。わたしにとっては、日曜におこなったワシントン D.C. の観光やアリゾナのテーマパークを訪問以上に、多くの人たちとの出会いが貴重なものに思えた。

疲れに反して、この研修で出会った人々が皆、温かく親切で、目が輝いていたことが印象的であった。それ故、わたしの心はいつも和み、楽しくなり、すぐに彼らと意気投合することができた。改めて学生時代に戻ったような錯覚さえおこった。視察する前日は挨拶や質問、会話力など少々心配していたが、そんなことは杞憂に終わった。教育現場は国が違っても楽しい場所であるし、そこで働いておられる方々も前向きな人々ばかりであった。それ故、お互いが笑顔で友好を深め、向こうも我々の質問に答えるだけでなく、我々に関心を示してくれて多くの質問をぶつけてきた。お互いの会話が楽しく、つい時間をオーバーしたことも何度かあった。各所で用意していただいた菓子類を食べ尽くしたこともあった。これも我々がこの研修を気兼ねせずに、楽しくかつ肩肘つかず、ありのままの姿で彼らと接し、積極的に参加できた証（あかし）である。「国際理解という親善の方が、食物や買い物・観光といったことより、数倍も楽しいことだ」と、気づかせてくれた所以である。

アリゾナ州のグレンデールでの 4 人組（シンディー、都甲先生、平岡先生、そして私）は本当にうまく調和し、それぞれの個性を生かしそれぞれの係分担をこなし、いろいろな場面をクリアーしていった。よいコンビで、素晴らしい成果をあげたカルテットだと思う。それとパートナー校のリー校長を、この素晴らしい研修の奏者のひとりと考えると、クインテットということになる。今回の研修は、成田での皆との素晴らしい出会いの印象が緒をひき、気分が高揚して愉快になり、ホテルに帰っても翌日の研修を待ち遠しく感じながらベッドに入るといった具合だった。

アメリカの教育と日本の教育の違いは大いにある。一クラス 20 人前後で構成されている点など、教育現場は大変違っている。アメリカの教育は現在「各人の能力の開発に努め、それを伸ばすことへの教育であり、本当の意味での個性を大切に教育だ」と、感じた。それに対して、日本の教育は「詰め込み教育の反省にたち、ゆとりある教育・個性を大切に教育への追求」とし、教育内容の軽減にはしり、結局学生の知識の低レベルさに悲鳴をあげている始末である。昨年の秋に開かれた「大学・高校の理科シンポジウム」に参加したが、大学生の常識の無さ・知識の偏り（理科系でも理科 4 教科のうち、一つか多くとも 2 つの教科内容しか知らない現実）を嘆いておられた。それ故、「来年度の国立大学の入試から 5 教科 7 科目に戻す」と告げられた。

ワシントン D.C. での教育視察では、SIGNET システムや、マグネット校制度、国際バカロレアへの参加など、できる生徒への積極的な取り組みが見られた。ちょうど、日本の 30 年前くらいの姿を見る思いだった。そのときは個性とゆとりを大切にするアメリカと言われて、日本教育は知識偏重だと囁かれていた。30 年たってみると、お互いの教育が 180 度変わってしまった。ただし、日本もまた 30 年前の教育への回帰現象の動きがそこかしこに見られ始めた。総合選抜制の廃止などは端的な例である。

今回経験できた異文化および国際化への教育姿勢・メディアとしてのコンピュータの活用など、多くの知識を吸収した。これらの知識を日常の教育へ利用し、具体的に生かしたいと考え始めた。また、6 月からのパートナーの訪日や、9 月からの「環境 - 土壌 -」の研究も楽しみにしています。

最後に、今回の研修中に細かいことまでお世話をいただいたジョーンズ夫妻をはじめ、多くのスタッフの方々にお礼申しあげます。

（文責： 廣田）



---

Master Teacher Program 2001 by Fulbright Memorial Fund  
( WashingtonD.C. & Glendale from 3/16 till 4/1 )



ARIZONA Glendale

---

F.M.F. による M.T.P.2001 報告書

---

発行年月日 2001 (平成13) 年 5 月 15 日

発行者 美鈴が丘高等学校 都甲誠嗣

平岡幸樹

廣田独志

編集 美鈴が丘高等学校 廣田独志

印刷・製本 株式会社 沼田総合印刷

広島市安佐南区沼田町阿戸 6 5 7 - 1

1 ( 0 8 2 ) 8 3 9 - 2 5 0 0

---

表紙写真： 桜の中のトーマス・ジェファーソン・メモリアル